



令和4年度 調査研究報告書 特別支援教育担当

特別支援教育における
ICT 機器の効果的な活用
に関する調査研究
(2年目/2か年研究)
～教員と子供の味方となる
「彩の国みんなのみかたプログラム」
の開発～

彩の国みんなのみかたプログラム



<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>



特別支援教育担当
「マスコットキャラクター」



埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center

目次



I 研究の概要

1	特別支援教育担当・調査研究について	2
2	研究主題設定の理由とその背景	2
3	本研究の目的	2
4	「学習等支援プログラム」の構想（令和3年度）	3
5	本研究の内容（概要・スケジュール）（令和3年度～4年度）	4
6	期待される研究成果	5

II プログラムについて ～「彩の国 みんなのみかたプログラム」とは～

1	「彩の国みんなのみかたプログラムの構造」について	6
2	プログラムの改良について（試行アンケート調査より）	9
3	取扱説明書 「彩の国みんなのみかたプログラム」って何だろう？	11

III 実践事例について

～「彩の国 みんなのみかたプログラム」と実践とを結ぶ事例集～

1	実践事例の解説	
	○実践事例集 項目解説（プログラムの関連について）	14
2	小学校・中学校・高等学校・特別支援学校における実践事例	
	○小学校 特別支援学級 学習面「聞く」	16
	○中学校 通級指導教室 学習面「話す」	19
	○小学校 通常の学級 学習面「読む」	22
	○小学校 特別支援学級 学習面「書く」	26
	○中学校 特別支援学級 学習面「見る」	28
	○高等学校 通常の学級 行動面「生活」課題に注意を集中する	30
	○特別支援学校 中学部 行動面「生活」気持ちのコントロール	32
	○特別支援学校 中学部 行動面「人とのかわり」	34

IV 講評

国立特別支援教育総合研究所 情報支援部主任研究員 織田 晃嘉 氏	36
----------------------------------	----

V 研究のまとめ

VI 資料

1	試行アンケート用紙	41
2	授業視察参観シート	43
3	参考・引用文献	44
4	取扱説明書「彩の国みんなのみかたプログラム」って何だろう？	46

研究協力委員

巻末（彩の国みんなのみかたプログラム QR コード等）	49
-----------------------------	----

特別支援教育における ICT 機器の効果的な活用 に関する調査研究（2 年目/ 2 か年研究）

I 研究の概要

1 特別支援教育担当・調査研究について

10年ぶりに文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」が、今回は高等学校も追加されて実施された。令和4年12月に結果が公表され、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒は小・中学校では8.8%、高等学校では2.2%であった。また、その児童生徒に「授業時間内に教室内で個別の配慮・支援を行っているか」という問いには小・中学校では19.8%、高等学校では50.5%が「行っていない」と回答している。校種を問わず、通常の学級における特別支援教育について、その重要性がより一層注目されているとともに喫緊の課題となっているといえる。

本担当では、令和3年度から令和4年度の2か年をかけ、国立特別支援教育研究所の主任研究員をスーパーバイザーとし、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校からの研究協力委員と共に実践授業公開、視察、「彩の国みんなのみかたプログラム」の開発、改良について調査研究を行ってきた。本報告では、1年目の研究を基に今年度に取り組んだ研究についてまとめ、より多くの方の「味方」となるよう発信していきたい。

2 研究主題設定の理由とその背景

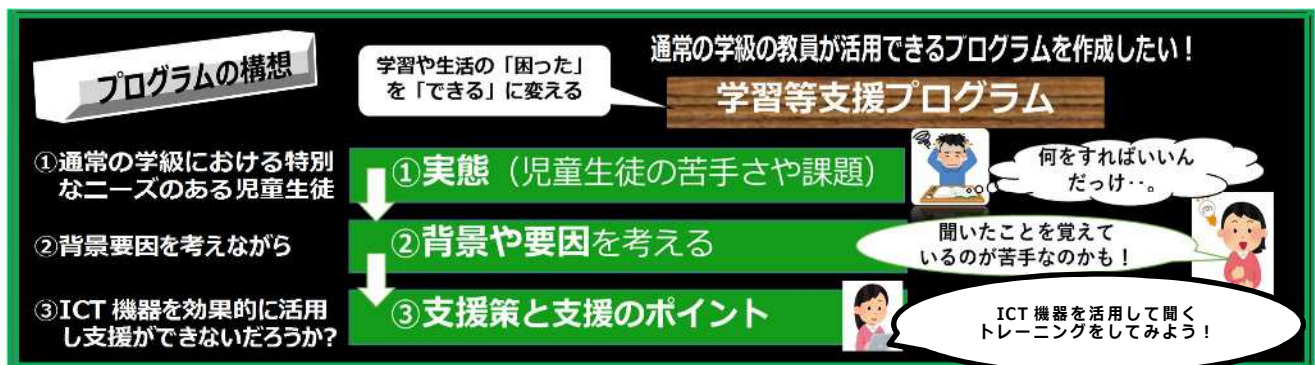
学習指導要領では、通常の学級における特別な配慮を必要とする児童生徒への支援の在り方が明記され、ICT機器の活用を含めた特別支援教育の一層の充実が求められている。文部科学省の「令和の日本型学校教育」や、「埼玉県特別支援教育環境整備計画」（令和元年～3年度）・「埼玉県特別支援教育推進計画」（令和4～6年度）においても特別支援教育を担う教員の資質向上が掲げられている。以上の点をふまえ、選定した研究主題である。

3 本研究の目的

- (1) 教員がICT機器を効果的に活用して児童生徒の学習や生活における特別な教育的ニーズを把握し、一人一人の潜在的な能力を伸ばすことのできる「彩の国みんなのみかたプログラム」を開発する
- (2) 特別支援教育に携わる教員に向けて、ICT機器を効果的に活用し、自身の資質向上につながる「彩の国みんなのみかたプログラム」となるよう改良し、実践事例と結び付けながら広く発信する。

4 ※ 「学習等支援プログラム」の構想（令和3年度）

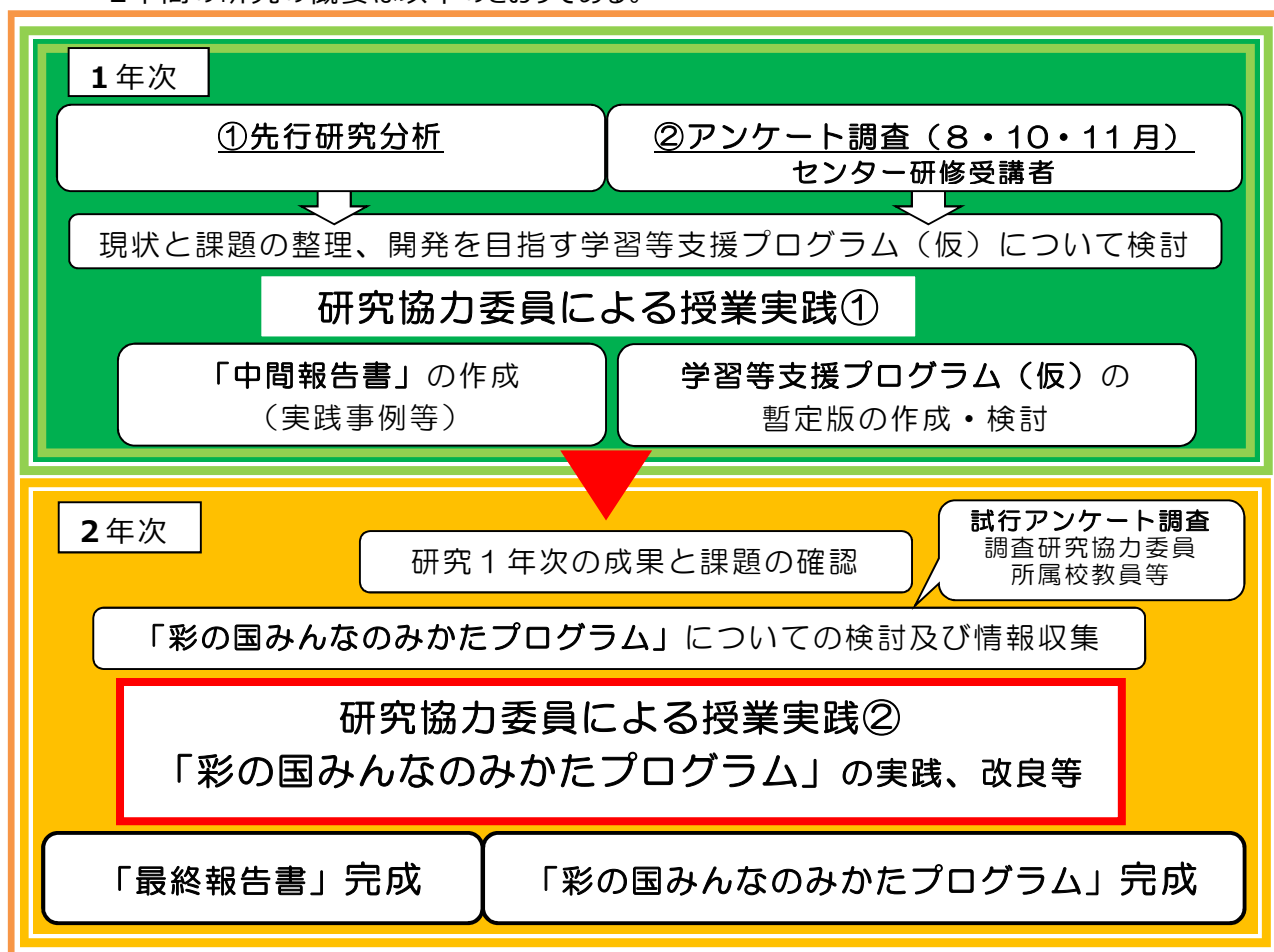
※令和3年度の研究は「学習等支援プログラム（仮）」の名称で表記しています。



5 本研究の内容（概要・スケジュール）（令和3年度～4年度）

（1） 研究の概要

2年間の研究の概要は以下のとおりである。



（2） 令和3年度の研究から

ア 理論研究

国、埼玉県の動向及び最新情報や先行研究に係る概要等を整理した。これらの知見をふまえ、今後のICT機器活用の推進と通常の学級における特別な配慮を必要とする児童生徒への指導及び支援の充実における一助となるよう取り組んでいくことが重要である。

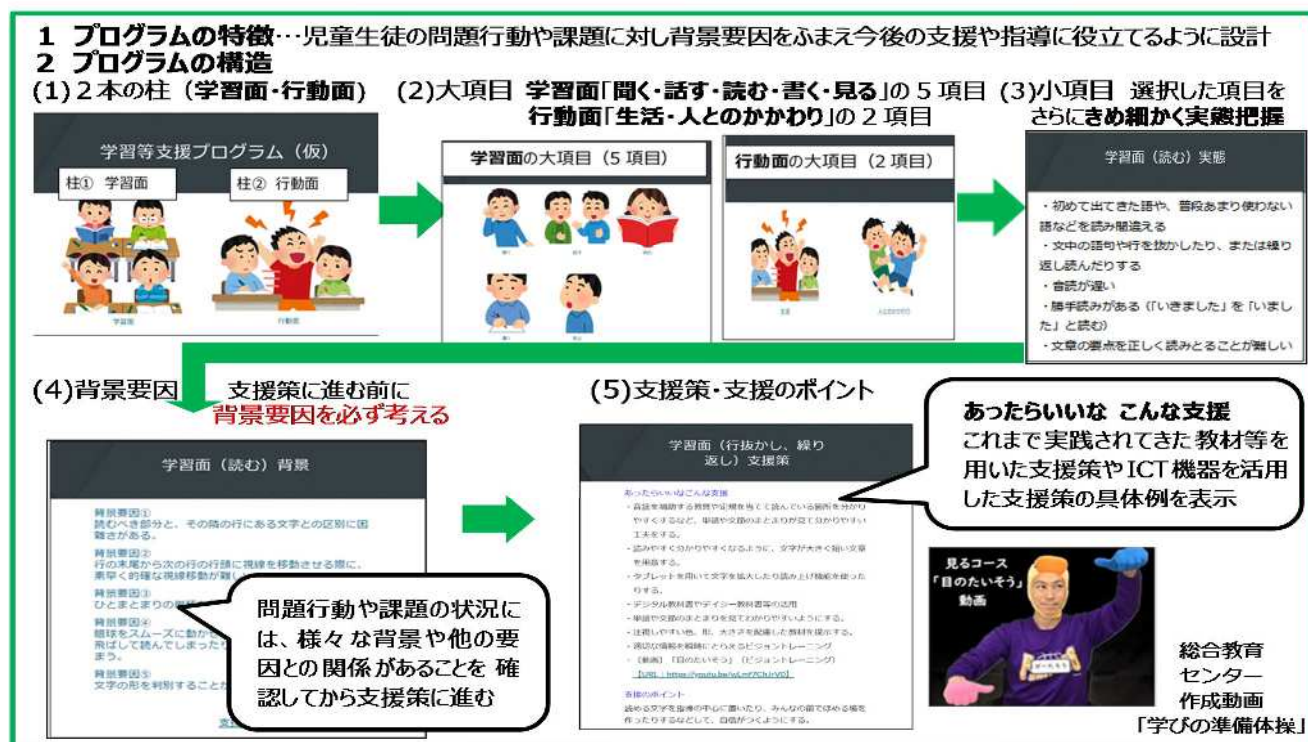
イ 調査研究

特別支援教育に携わる公立幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員296名のアンケート結果から、ICT機器を活用した効果的な支援策等の情報を共有できていない現状が見られた。また「ICT機器は便利だから」と即効性のある解決策を求める教員の回答も見られた。そこで「学習等支援プログラム（仮）」では、背景要因を含めながら様々な学校での取組や支援策について紹介、共有できるようにすることが重要であると示唆された。

ウ 授業実践

「学習等支援プログラム（仮）」と実践を結び付けられるよう、公立小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の研究協力委員による授業実践を8事例と、授業視察を実施した。

エ 「学習等支援プログラム（仮）」の開発とその構造について



（３） 研究のスケジュール

ア 令和 3 年度の取組の内容（研究 1/2 年）

事前調査	・協力委員への予備調査 ・先行研究の調査
第 1 回 令和 3 年 5 月 28 日(金)	・研究概要の提案と検討（年間の進め方含む） ・先行研究の分析（事務局） ・教員向けアンケート調査の検討 ・学習等支援プログラム（仮）のイメージを共有① ・授業公開の方法について提案
第 2 回 令和 3 年 7 月 9 日(金)	・学習等支援プログラム（仮）のイメージを共有② ・授業公開授業者決定（授業公開の方向性について検討）
第 3 回 令和 3 年 9 月 17 日(金)	・授業公開の指導案検討 ・中間報告書様式の提案
令和 3 年 8 月～11 月	【研修教員向けアンケート調査実施】 Google フォームにて回答・情報収集 特別支援教育コーディネーター研修会（幼小中コース） 高等学校のこれからの学びの推進研修会（高・特）特別支援教育コーディネーター 通級指導教室新担当教員研修会（難聴言語、発達障害・情緒障害）
第 4 回 令和 3 年 10 月～12 月	・協力委員の各学校にて授業公開や実践発表 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校 通常の学級、特別支援学級、通級指導教室、特別支援学校 8 校
第 5 回 令和 3 年 12 月 7 日(火)	・授業公開・視察についての協議 ・「学習等支援プログラム（仮）」について確認 ・中間報告書について説明・協議
令和 3 年 11 月～ 令和 4 年 2 月	・中間報告書作成 ・プログラムの暫定版 「学習等支援プログラム（仮）」作成
令和 4 年 3 月	・調査研究所内発表 ・HP 公開（ダイジェスト版・中間報告書） ・中間報告書の発行 ・「学習等支援プログラム（仮）」暫定版の完成

イ 令和 4 年度 of 取組の内容 (研究 2/2 年目)

第 1 回 令和 4 年 5 月 3 1 日 (火)	・研究 1 年次の成果と課題の確認 ・「彩の国みんなのみかたプログラム」について検討及び情報収集
第 2 回 令和 4 年 7 月 8 日 (金)	・アンケート (調査研究協力委員・所属校教員等) 小学校 2 校 (鴻巣市立吹上小学校・幸手市立行幸小学校) 中学校 1 校 (朝霞市立朝霞第一中学校) ・「彩の国みんなのみかたプログラム」の完成に向けての実践及び改良
第 3 回 令和 4 年 9 月 1 3 日 (火)	・実践事例集 (案) 検討 ・研究協力委員による授業視察について
第 4 回 令和 4 年 1 0 月 ~ 1 2 月	・授業公開・視察・実践発表 (協議も含む) (8 校) 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校で実施 通常の学級・通級指導教室・特別支援学級・知的障害特別支援学校
第 5 回 令和 4 年 1 2 月 1 6 日 (金)	・「彩の国みんなのみかたプログラム」にプログラムの名称を決定 ・授業視察報告・情報共有 ・「彩の国みんなのみかたプログラム」の取扱説明書について ・最終研究報告書作成に向けて ・研究のまとめ
令和 4 年 11 月 ~ 令和 5 年 2 月	最終報告書作成 「彩の国みんなのみかたプログラム」の修正・改良
令和 5 年 3 月	調査研究 所内発表 最終報告書の発行 「彩の国みんなのみかたプログラム」の完成 HP 公開 (ダイジェスト版・最終報告書)

(4) 令和 4 年度の研究 ~ 「彩の国みんなのみかたプログラム」と授業実践との往還 ~ 更なる進化へ ~

- ① 「彩の国みんなのみかたプログラム」の試行アンケートの実施 (小学校 2 校・中学校 1 校)
→ プログラムを試行した教員から挙げられた意見を委員で共有し、プログラムの改良に生かす。
- ② 「彩の国みんなのみかたプログラム」の改良及び取扱説明書の作成
→ 情報収集と共に、その効果についても確認しながら完成に向けて研究を続けると共に、プログラムがより身近で活用しやすくなるよう取扱説明書を作成する。
- ③ 研究協力委員によるプログラムの内容に基づいた授業実践の実施 (小・中・高・特別支援学校)
→ プログラムが日常の指導や支援に生かされる『結び目』となるよう、授業実践を実施する。

6 期待される研究成果

「彩の国みんなのみかたプログラム」の開発と活用により、全ての校種の教員が児童生徒の背景要因をふまえた実態把握や効果的な支援方法についての理解や共有ができ、特別支援教育の充実、教員の資質の向上が期待される。



Ⅱ プログラムについて～「彩の国みんなのみかたプログラム」とは～

1 「彩の国みんなのみかたプログラム」の構造について

(1) プログラムの目的

ア ICT機器を活用した本プログラムを開発することで、児童生徒の背景要因を踏まえた実態把握や効果的な支援策・支援のポイントを共有し、通常の学級の教員の資質の向上を図る。

イ 本プログラムに基づき、児童生徒の学習面や行動面についての背景要因をふまえた教育的ニーズに応えた支援や指導をすることで、児童生徒の課題の克服や改善につなげる。

(2) プログラムの特徴と構造

ア 特徴

本プログラムは、児童生徒の問題行動や課題に対し、背景要因をふまえ、今後の支援や指導に役立てるよう設計している。

イ 基本構造

① 2本の柱… 学習面・行動面

② 項目……学習面における大項目は、「聞く・話す・読む・書く・見る」の5項目である。

行動面における大項目は「生活・人とのかかわり」の2項目である。

③ 実態……大項目に対応した5つの小項目を設定している。

※「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査項目」(文部科学省)を基に整理している。

④ 背景要因…小項目を選択すると、必ずその課題に対する背景要因の例が表示される。

※参考文献等はP48～P49

⑤ 支援のポイント…配慮事項や周囲の児童生徒への対応等

支援策……明日からの支援に生かせる内容アンケート結果や文献等の資料を基に作成
ICTを活用した支援方法（デジタル）と今まで実践されてきた普遍的な支援方法(アナログ)のベストミックス

ウ プログラムの内容（サイトの構造について）

サイト上で作成しているため、ダウンロードやインストールの必要がなく、PC やタブレット、スマートフォンで活用ができる。



ア 2本の柱について



イ 項目について

学習面の項目（5 項目）

学習面

- ・ 聞く
- ・ 話す
- ・ 読む
- ・ 書く
- ・ 見る



行動面の項目（2 項目）

行動面

- ・ 生活
- ・ 人とのかかわり



項目をクリックするとそれぞれの**実態**へ移動します。

ウ **実態**について：選択した項目についてきめ細かく実態把握する。

項目・「読む」を選択した場合

「読む」の実態（5 項目）



読む

(学習面)

実態

初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える

文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする

音読が遅い

勝手読みがある

⑨ 文章の要点を正しく読み取ることが難しい

あてはまるとされる**実態**をクリックすると
背景要因の例に移動します。

工 **背景要因**について：支援策に進む前に背景要因を必ず考えられるよう掲載している。

例：実態「文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする」

行抜かしや繰り返し (背景)

学習面（読む）背景

- ①文字を音の情報に変換することに時間がかかってしまう
- ②視線を行に沿って正しく速く追うことが難しい
- ③文字を順番に追うことが難しい
- ④瞬時に単語や文節を捉えることが難しい
- ⑤意味を捉えながら、文節に区切って読むことが難しい

考えられる**背景要因**の例が表示される。

それぞれの問題行動や課題の状況には、様々な背景や他の要因との関係があることを確認することができる。

①

支援策

ホーム

戻る

支援策をクリックすると**支援のポイント・支援策**へ移動します。

オ **支援のポイント・支援策**について

支援のポイント

・発表の際には予め練習ができるようにし、読みやすい文章があたるよう児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつくようにする。

支援のポイント

支援や指導をする際に配慮することや周囲の児童生徒への対応等が記載されている。

支援策「あったらいいな」こんなサポート例

- ・音読を補助する教具や定規を当てて読んでいる箇所を分かりやすくするなどまとまりが見て分かりやすい工夫をする。
- ・読みやすく分かりやすくなるように、文字が大きく短い文章を用意する。
- ・タブレットを用いて文字を拡大したり読み上げ機能を使ったりする。
- ・デジタル教科書やデジジ教科書等の活用する。
- ・単語や文節のまとまりを見てわかりやすいようにする。
- ・注視しやすい色、形、大きさに配慮した教材を提示する。
- ・適切な情報を瞬時にとらえるビジョントレーニングをする。

支援策

「あったらいいな」こんなサポート例

これまで実践されてきた教材等を用いた支援策や ICT を活用した支援策の具体例が表示される。



目のたい
う

本センターで作成した動画「**学びの準備体操**」から項目に関連する動画や、研究協力委員が作成した動画やプリント等も掲載している。動画はそのまま再生が可能で、プリント等はダウンロードすることができる。

2 プログラムの改良について（試行アンケート調査より）

（１） アンケート調査の目的

本研究は、先生方が ICT を効果的に活用して、学習や生活における児童生徒の教育的ニーズを把握し、その報告書を作成し、広く発信することをねらいとしている。

学習支援プログラムアンケート調査では、暫定版の学習支援プログラムを主に通常の学級の先生方を対象に試行してもらい、特別なニーズのある児童生徒の支援に役立つと感じた点、また今後より多くの先生方が活用しやすくなるには、どのように改善していくと良いのかを調査整理し、学習支援プログラムに反映させることを目的としている。

（２） アンケート調査の対象

◇小学校・中学校の通常の学級及び特別支援学級を担当している教員【36名回答】

（３） 「学習支援プログラム試行アンケート」の内容

ア 回答者について

・勤務している校種及び学校名

イ プログラムを試行した感想

・良かった点及び改善点等

ウ プログラムを試行した評価

・1～4で評価及びその理由



Google フォームで回答してもらい試行した先生方が感じたことや気づいたことを、調査研究協力委員と共有し、即時的にプログラムの改良に生かせるようにした。

（４） アンケート調査結果

ア プログラムを体験してみて良かった点（複数回答）

- ◎サポートの仕方が細かく記載されていて個に応じた支援を考える際に参考になった。【19名】
- ◎サイトのデザインがシンプルで使いやすい。【19名】
- ◎動画を参考にすることができ、分かりやすかった。【13名】
- ◎支援の例や動画が担当している児童に活用できると感じた。【5名】
- ◎背景・要因に着目して、考えることができることが良かった。【7名】
- ◎気付かない子どもの傾向や特性を知ることができた。【7名】
- ◎項目が見やすく分けられていて、困っている項目からダイレクトに支援策を知ることができたことが良かった。【3名】
- ◎支援の方向性を明確にすることができた。【4名】

イ プログラムを体験してみて改善してほしい点

- ▲具体的なガイド（解説）があると、もっと使いやすくなると思う。
- ▲初級～上級編等のトレーニング動画があると個別に学習できるので良いと思った。
- ▲個々のニーズに応えることで、子どもの意欲向上にもつながるのではと感じた。
- ▲緊張を和らげる（場面寡黙）プログラムや多動の子どもが楽しめるトレーニングの例があれば教えてほしい。
- ▲ワークのような体験できるものがあると学習後に振り返りができて良いと思った。
- ▲日本語が話せない外国籍の子どもへの支援方法もあると良いかと思う。
- ▲算数が苦手な児童への支援策も追加してもらえると良いと感じた。
- ▲保護者向けや児童生徒向けのプログラムも体験できると良いと思った。
- ▲具体的な支援策の引き出しがもっと多くあると良いと思った。
- ▲支援策が少ない項目がある。
- ▲支援する実際の様子を画像や動画等で見られると良かった。
- ▲文字が大きく、画面に写し出される内容が全部ではないため、見づらかった。
- ▲見立てが困難な場合があるので、「ほんとうのわたしをみつけて」と一緒に活用できると良い。
- ▲質問項目に少し分かりづらいところがあったので、解説があると良かった。

ウ 評価平均（１～４の４段階で評価）

評価	１	２	３	４	合計
人数	０名	１名	１４名	２１名	３６名
評価平均					3.6

エ 評価の理由

【評価４の理由】

- ◎ 困難に応じた支援の方法が具体的に分かりやすく示されているため、実際の指導に生かすことができると感じたから。
- ◎ 動画などがあり、児童を理解するための一助となったと思ったから。
- ◎ 行動分析だけでなく、対策や支援方法まで、具体的に明示されていることが良い。

【評価３の理由】

- 今後もっと広まってほしい。活用していきたいと思った。
- 教員が支援をする足がかりができたことがよかった。
- 多くのアイデアや引き出しがあることで、個に応じた支援を探れることがよい。
- 子どもが意欲的に取り組むことができると感じたから。
- ▲ 他の項目もあると良いと感じたから。

【評価２の理由】

- ▲ 今ある支援策だけでは、まだ効果が弱いと感じたから。

（５） アンケート調査のまとめ

ア 回答した教員について

小学校・中学校の通常の学級及び特別支援学級を担当する教員に「学習支援プログラムの試行アンケート」を実施した。通常の学級３０名、特別支援学級５名、通級指導教室担当教員１名の３６名の回答があった。

イ 改良点について（プログラムを試行しての感想より）

過半数を超える方が、最高評価４をつけるなど、児童生徒の問題行動や課題に対し、背景要因を踏まえ、今後の支援や指導に役立てることができるように作成されたプログラム内容を評価していた。

一方で、今後の期待も含め、「このプログラムを広く発信したい、より効果的に活用したい」という思いで、改善してほしい点もいくつか挙げられた。

- ・「プログラムの解説がほしい」
- ・「具体的な支援策の引き出しがもっとほしい」
- ・「サイト内の表示の大きさなど見やすくしてほしい」

このような意見を参考にして、随時、研究協力委員とも情報共有しながら、プログラムの改良を進めた。

「具体的なガイドがあるとよい」「解説がほしい」という意見から次項の取扱説明書「彩の国みんなのめかたプログラムって何だろう？」を作成した。

3 取扱説明書「彩の国みんなのみかたプログラムって何だろう？」の作成

「彩の国みんなのみかたプログラム」は経験や校種等を問わず、誰にとっても活用しやすいプログラムとなっている。誰もが身近で活用しやすくなるように、いわゆる「取扱説明書」を作成した。

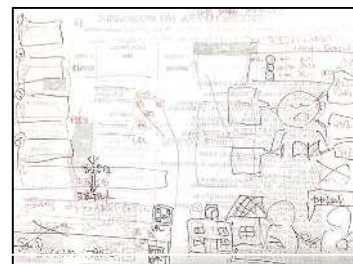
特長

○A4一枚両面のリーフレット型になっており、内容や構造がコンパクトに分かりやすく書かれている（印刷設定は両面・短辺綴じ）。

○「全体像が見えるものがあるとよい。」「具体的な実態が書いてある方が、使いやすい人もいます。」といった研究協力委員会での意見等から、実態の全ての項目を一覧で掲載している。

○「項目だけだと具体的な様子が思い浮かばない。」という場合は、裏面の実態の一覧を見ながらプログラムを活用することができる。

特別支援教育の担当者だけでなく、通常の学級の教員も含め、誰もが「彩の国みんなのみかたプログラム」に興味を持ち、手に取ってもらえるよう作成をしている。



研究協力委員による取扱説明書案

表面

①柱
学習面・行動面

②項目

③実態

④背景要因

⑤支援のポイント
支援策「あったらいいな」こんなサポート

**「彩の国みんなのみかたプログラム」
って何だろう？**

このプログラムは、児童生徒の「できた」「わかった」を増やします！ なぜなら、気になる内容をクリックしていくことで、教員が、児童生徒の学習面や行動面の特別なニーズについて、背景要因を踏まえた指導をすることができるからです。

↓ URL はこちら
<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

QRコード
はこちら→

印刷したものをこちらで折るとリーフレットになります

A4 印刷両面・短辺綴じ

裏面

①柱	②項目	③実態	④背景要因	⑤支援のポイント 支援策
学習面	聞く	- 聞き間違いがある（「知った」を「行った」と聞き違える）。 - 聞き間違いがある。 - 個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。 - 指示の理解が難しい。 - 話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず、ついていけない）。 - 適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口である）。 - ことばにつまったりすることがある。 - 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をしたりする。 - 思いっぴきままに話すなど、筋道の通った話をすることが難しい。 - 内容を分かりやすく伝えることが難しい。 - 初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える。 - 文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返して読んだりする。	例 - 文字を音の情報に変換することに時間がかかってしまう。 - 視線を行に沿って正しく速く追うことが難しい。 - 文字を順番に追うことが難しい。 …… …… ポイント 必ず背景要因を確認してから支援策に行きます。 ↓ QR コードはこちら ↓ URL はこちら https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/	例 支援のポイント 発表の際にはあらかじめ練習ができるようにして、読みやすい文章が当たるように配慮する。 例 支援策「あったらいいな」こんなサポート - 読みやすく分かりやすいように、文字を大きくしたり、短い文を用意したりする。 - デジタル教科書やデジタル教科書の活用をする。 具体例（動画等もあります） 目のたいそう
	話す	- 話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず、ついていけない）。 - 適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口である）。 - ことばにつまったりすることがある。 - 単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をしたりする。 - 思いっぴきままに話すなど、筋道の通った話をすることが難しい。 - 内容を分かりやすく伝えることが難しい。 - 初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える。 - 文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返して読んだりする。		
	読む	- 音読が難しい。 - 勝手読みがある（「いきました」を「いまして」と読む）。 - 文章の要点を正しく読みとることが難しい。 - 読みにくい字を書く（字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない）。		
	書く	- 漢字の細かい部分を書き間違える。 - 句読点が抜けたり、正しく打つことができなかったりする。 - 限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない。 - 文字や行を読み飛ばしてしまう。 - どのように行動してよいかわからずキョロキョロしている。 - 物の全体像や細部がわからない。 - 周囲の状況がわからない。人の表情などが分からない。分かりにくい。 - 板書についていけない。		
	見る	- 物の管理（落し物・忘れ物・整理整頓）が苦手である。 - 落ち着かない。歩み幅が目立つ。 - 課題または遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 - 指示通りの行動、周囲に合わせた行動をすることが難しい。 - 気持ちの切り替え、自分をコントロールすることが苦手である。		
行動面	生活	- 友だちとのトラブルが多い。 - 相手の気持ちを考えることが苦手である。 - 話を最後まで聞くことが苦手である。 - 言葉をうまく使えない。 - ルールを守って行動することが苦手である。		
	人とのかわり	- 友だちとのトラブルが多い。 - 相手の気持ちを考えることが苦手である。 - 話を最後まで聞くことが苦手である。 - 言葉をうまく使えない。 - ルールを守って行動することが苦手である。		

⑤支援のポイント

支援策
「あったらいいな」
こんなサポート



印刷したものをこちらで折るとリーフレットになります

山折り

このプログラムは、児童生徒の「できた」「わかった」を増やします！
なぜなら、気になる内容をクリックしていくことで、教員が、
児童生徒の学習面や行動面の特別なニーズについて、背景要因を踏まえた指導をすることができるからです。

↓ URL はこちら

<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

QRコード
はこちら→



①柱→②項目→③実態→④背景要因→⑤支援のポイント
支 援 策

学 習 面	聞く	・聞き間違いがある（「知った」を「行った」と聞き違える）。 ・聞きもらしがある。 ・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。 ・指示の理解が難しい。 ・話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず、ついていけない）。
	話す	・適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口である）。 ・ことばにつまったりすることがある。 ・単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をしたりする。 ・思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。 ・内容を分かりやすく伝えることが難しい。
	読む	・初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える。 ・文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする。 ・音読が遅い。 ・勝手読みがある（「いきました」を「いました」と読む）。 ・文章の要点を正しく読みとることが難しい。
	書く	・読みにくい字を書く（字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない）。 ・独特の筆順で書く。 ・漢字の細かい部分を書き間違える。 ・句読点が抜けたり、正しく打つことができなかつたりする。 ・限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない。
	見る	・文字や行を読み飛ばしてしまう。 ・どのように行動してよいかわからずキョロキョロしている。 ・物の全体像や細部がわからない。 ・周囲の状況がわからない。人の表情などがわからない、分かりにくい。 ・板書についていけない。
行 動 面	生活	・物の管理（落し物・忘れ物・整理整頓）が苦手である。 ・落ち着きがない、出歩きが目立つ。 ・課題または遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 ・指示通りの行動、周囲に合わせた行動をすることが難しい。 ・気持ちの切り替え、自分をコントロールすることが苦手である。
	人との かわり	・友だちとのトラブルが多い。 ・相手の気持ちを考えることが苦手である。 ・話を最後まで聞くことが苦手である。 ・言葉をうまく使えない。 ・ルールを守って行動することが苦手である。

例

- ① 文字を音の情報に変換することに時間がかかってしまう。
- ② 視線を行に沿って正しく速く追うことが難しい。
- ③ 文字を順番に追うことが難しい。
- ④ ……
- ⑤ ……

ポイント

必ず背景要因を確認してから支援策に行きます。

↓ QR コードはこちら



↓ URL はこちら

<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

例 支援のポイント

発表の際にはあらかじめ練習ができるようにして、読みやすい文章が当たるように配慮する。

例

支援策「あったらいいなこんなサポート」

- ・読みやすく分かりやすくなるように、文字を大きくしたり、短い文を用意したりする。
- ・デジタル教科書やデジ教科書等の活用をする。

具体例（動画等もあります）



目のたいそう

Ⅲ 実践編

実践事例集



彩の国みんなのみかたプログラムは

学習面の「聞く」「話す」「読む」「書く」「見る」の 5 項目

行動面の「生活」「人とのかかわり」で構成されています。

ここで紹介する 8 つの実践事例は、プログラムと実践の結び目となるよう、7 つの項目で掲載しています。

なお、**プログラムの取扱説明書**（マニュアル）「彩の国みんなのみかたプログラム」って何だろう？ は **12～13 ページ**（VI 資料 4 46～47 ページ）に掲載されています。事例集と併せて、こちらもぜひ御覧ください。

Ⅲ 特別支援教育における ICT 機器の効果的な活用に関する授業実践

1 実践事例の解説（彩の国みんなのみかたプログラムの関連）

今年度行った授業実践は、協力委員が I C T 機器の効果的な活用に関する調査研究の実践研究として、取り組んだ実践である。これらの授業実践の成果や課題を踏まえ、次年度に作成する実践事例集や学習等支援プログラムへのアプローチとしたいと考える。

次ページからの授業実践を参照するに当たり、実践事例の構造を以下に記す。

1 実践事例

小学校 特別支援学級

彩の国みんなのみかたプログラムの項目と対応した事例で記述

○項目

柱・「項目」
例・学習面「話す」

○実態区分

実態

例・内容を分かりやすく伝えることが難しい

■ 事例 順序立てて話すことが苦手な小学校 4 年生

○実態（学校での様子）

対象の児童生徒 1 名（A さん）について実態を記述

苦手なことや課題となること
には背景があることを考える。

苦手なことや課題となること

考えられる背景

強みや得意なことを指導に
生かせるように合わせて書く。

強みや得意なこと

指導に生かせそうなこと

○使用する予定の ICT 機器等

○指導例

- 1 単元名・題材名「○○○○」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
- 3 展開（または指導例）

本時において授業で配慮したことと共に、授業をしたことによる児童生徒の変容や今後の展望についてなどの長期的な視点も記述している。

時	主な学習活動	・指導上の ◎ICT活用
1		
2		
3		

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）
.....

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

実践事例(1) 小学校 特別支援学級

○項目

学習面「聞く」

○実態区分

指示の理解が難しい

■ 事例 聞くことに課題がある児童への支援・指導

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・指示を聞いて正確に行動すること
- ・ある程度の時間、聞いた指示を覚えて行動すること
- ・正確に指示を聞き取ること

強みや得意なこと

- ・前向きに活動に取り組む
- ・自分なりに工夫して取り組む
- ・タブレット端末を概ね操作できる

考えられる背景

- ・聞いたことを記憶することに困難さがある
- ・ワーキングメモリに弱さがある
- ・指示を聞くことに困難さがある

指導に生かせそうなこと

- ・学習意欲
- ・該当学年程度の文字を読む力
- ・タブレット端末に対する慣れ

○使用する予定の ICT 機器等

- ・タブレット クロームブック（Google）
- ・学習支援アプリ「スマイルネクスト」（ジャストシステム）

○指導例

1 単元名・題材名「計算しよう」

2 本時（本活動）の学習（個人目標）

- ・四則計算が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりするとともに、学習した四則計算で正しい答えを求めることができる。
- ＜知識及び技能＞



3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例 ○児童の活動 指導者の主な指示、発問等 ☆予想される児童の反応 ◇指導者の動き ※支援の手だて *評価の観点
2	1 あいさつ	○姿勢を正してあいさつをする。 ☆姿勢を整え挨拶をしようとする。 ◇着座の姿勢の整わない児童に声をかける。 ※着座の姿勢の整わない児童の椅子や机の位置を調整する。
3	2 個別の課題①に取り組む 「計算タイム」 	・活動内容や指示内容を、口頭で伝えるだけでなく GoogleClassroomに提示することで、聞き逃したり、聞き間違ったりしないようにする。 ◎GoogleClassroomに活動内容や指示内容を提示する。 ○マス計算に取り組む。 □素早く、正確に行えるよう声をかける。 ◇タイムを測る、丸つけをする。
5	3 個別の課題②に取り組む 「文章問題タイム」 	○既習内容を活用した文章問題に取り組む。 □これまで学習した内容で解けることを伝える。 ◇解き終わった児童の丸つけを行う。
20	4 共通課題に取り組む 「パワーアップタイム」 様々な計算方法（四則計算）を用いて解くことができる問題    	○様々な計算方法を使って解くことができる問題に取り組む。 □絵の中から計算で数を求められる絵を見つけて式をたてて答えを求めましょう。 □これまで学習した計算方法（四則計算）が使えることを伝える。 ◇1問解き終わった児童には、次の問題に取り組むよう促す。 *四則計算が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりするとともに、学習した四則計算で正しい答えを求めることができる。 <知識及び技能> ○解答を発表する。 □自分の解答を発表させる。 ◇発表できた児童を全員で称賛する。 ※間違えても一緒に考えることを伝え、安心して発表できるようにする。

10	5 本時の学習内容の定着を図る 「テストタイム」	・タブレット端末や学習支援アプリを活用することで、児童が自らの課題に合った問題に取り組み、解決するための力をつけられるようにする。 ◎タブレット端末内学習支援アプリ「スマイルネクスト」で、実態に応じた問題に取り組む。 ○タブレットを用意して、四則計算の問題に取り組む。 □本時の学習を使って考えられることを伝える。 ◇端末の操作を支援する。 ※事前にそれぞれの実態に合った課題を設定しておく。
3	6 ふりかえり 「確認タイム」	○本時の学習について確認する。 □本時の学習で学んだことを児童とともに確認する。 ☆今日の学習について手を挙げて発表する。 ※本時の学習を想起させるような話をする。
2	7 あいさつ	○姿勢を正してあいさつをする。 ☆姿勢を整え挨拶をしようとする。 ◇着座の姿勢の整わない児童に声をかける。

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・指示内容や活動内容を聞き逃してしまったり、聞き間違えてしまったりすることで、学習意欲が低下してしまうことが無いようにする。
- ・自ら活動内容や指示内容を、何度でも確認することができるようにすることで、自信をもって学習活動に取り組めるようにする。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・言葉で指示が難しい児童の中で、聞き漏らしや聞き逃しがある児童に対しGoogleClassroomの機能を活用することで、指示の確認を児童が自らできるようになり安心して活動に取り組んでいた。
- ・苦手の活動であっても意欲的に活動する様子が見られた。



※Googleクラスルーム（クラス単位で生徒の学習内容を運営・管理ができる）

- ・GoogleClassroomの機能を活用することにより、児童への課題の提示や児童からの課題の提出が容易に行えた。また、提出されたものを、相互に見合うことができた。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・「聞くこと」に課題のある児童の中で、「聞き漏らしや聞き逃し」以外の課題のある児童に対する支援の方法を考えていきたい。
- ・児童が相互に意見交換をする方法として、Jamboard（ジャムボード）やスクールタクトを活用していきたい。

※Jamboard
デジタル
ホワイトボード
(Google)



※スクールタクト
授業支援クラウド
(コードタクト)



実践事例(2) 中学校 通級指導教室

- 項目 学習面「話す」 ○実態区分 内容をわかりやすく伝えることが難しい

■ 事例 自分の考えを上手に伝えるのが苦手な中学2年生

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・自分の考えを話すこと
- ・スピーディーな会話をする
- ・大人数とコミュニケーションをとること

強みや得意なこと

- ・じっくり考えられること
- ・丁寧に作業が取り組めること
- ・手先が器用なこと

考えられる背景

- ・本人の特性によるもの
- ・自分の考えを伝えることの自信のなさ
- ・人前で話すことの経験不足

指導に生かせそうなこと

- ・じっくりと考えられるため、事前に準備する
- ・丁寧にできるところから振り返りを行う
- ・通級の授業への意欲の高さ

○使用する予定の ICT 機器等

- ・ iPad(ビデオで録画)

○指導例

- 1 単元名・題材名「自分の考えを上手に伝える方法を考えよう」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
 - ・自分の考えをわかりやすく伝える方法について検討する。
 - ・検討した内容をもとに、より良い話し方を実践できる。

3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
5	1 「ウィークリートーク」を行う。 （1週間の出来事を話す）	◎ウィークリートークで話しているところを録画する。 ・毎回の授業で取り組んでいる内容を活用する。 
8	2 スキルアップ学習を行う。	・コグトレ※を中心としたスキルアップ学習を行う。 ※コグニティブトレーニング（認知トレーニング）
7	3 自分の考えを伝えるときの 良い方法を考える。	・ワークシートを使い、「伝え方」について考えさせる。 ・「話す内容」、「話す順番」、「話し方」など多角的に 検討できるようにする。
7	4 録画した「ウィークリートーク」を 一緒に見る。	◎録画したものを見て、先に検討したものとの差異を考え させる。同じ内容をどのように伝えればわかりやすくなるか を、本人と会話をしながら考える。
8	5 「2学期の振り返り」を話せる ように準備をする。	・ワークシートを利用する。【※教材参照】 ・話す内容の概要を抑えるようにする。 
6	6 「2学期の振り返り」について 5分間話す。	・ここまでの内容を踏まえ、改善点を 生かして話す。 ◎録画をする。
5	7 録画したものを確認する。	◎取り組みの成果について生徒本人の考えを聞く。 ・教師からも良かったところにフィードバックをする。
4	8 振り返りを行う。	・本時の取り組みについての感想を話す。 ・これからの生活に生かせるよう話をする。

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・生徒本人の様子を録画することで、客観的に自分の様子を見られるようにする。
- ・本人の特性を生かし、じっくりと考える時間を設ける。
- ・検討したことを実践し、その内容についてのフィードバックを行う。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・タブレットで録画したものを見せることで、客観的に自分の話している姿を見ることができた。
- ・客観的に見ることで、改善点なども自分自身で見つけることができた。
- ・話すことへの自信が少しついたため、声が少し大きくなった。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・今回の内容を受けて、冬休み明けも「冬休みの振り返り」を行おうと考えている。
- ・「考えて話す」という取り組みを繰り返し、自信がつくようにしていきたい。

2学期の振り返りをわかりやすく伝えよう！

氏名()

目標：2学期のできごとを振り返り、先生にわかりやすく伝えよう！

1. 2学期で印象に残っていること、頑張ったこと、楽しかったことを思いつく限り書いてみよう。

いきなり文章を書くのではなく、まずは箇条書きで記入し、「書きやすさ」を感じられるようにする。

2. 1の中から伝えたいものを2つ選ぼう(○をつけてみよう)。

3. なぜその2つを選んだか、その理由をそれぞれ書いてみよう。

【1つ目】

【2つ目】

書きたい内容を選択したあとに、文章にする。

4. 伝えるときのポイントを確認しよう。

●流れをパターンにはめ込もう。

- ①私が今回伝えたいことは「○○○」と「◇◇◇」です。
- ②1つ目の「○○○」については「★★★」だから選びました。
～そのままその内容の説明～
- ③2つ目の「◇◇◇」については「■■■■」だから選びました。
～そのままその内容の説明～
- ④以上で私が2学期を振り返り、伝えたい話を終わりにします。

人に伝えるときには
「根拠」を
大切にしよう！

●相手の目を見て大きい声で話そう。

●遠すぎないようにゆっくりと話そう。

絵画を見て、「話し方」で気づいたことがあれば書いてみよう！

授業の中でパターン化させる。結果、多くの場面で使えるように般化させられる。

5. 実際に、「2学期の振り返り」を先生に伝えよう。

実際に「2学期の振り返り」を話してみる。

6. 今日の授業の振り返りをしよう。

- (1)自分の「2学期の振り返り」を話すことができた。(A ・ B ・ C)
- (2)内容をわかりやすく先生に伝えることができた。(A ・ B ・ C)
- (3)「根拠」を伝えることができた。(A ・ B ・ C)

【授業の感想】

実践した内容の振り返りを行い、次回の授業内容に活かす。

実践事例(3) 小学校 通常の学級

○項目

学習面「読む」

○実態区分

文章の要点を正しく読み取ることが難しい
(情報の統合が難しい)

■事例 情報の読取りと統合、言葉の読み書きが苦手な 小学4年生

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・必要な情報を見つけること
- ・見つけた情報から選び取り書くこと
- ・調べるためのモチベーションをもちにくい
- ・文章や漢字の読み書き（該当学年）

強みや得意なこと

- ・口頭でのやりとり
- ・ゲーム形式やクイズ的な内容はモチベーションが高まりやすい
- ・視覚処理、書き取り軽減での支援、具体的な操作

考えられる背景

- ・視覚の認知機能の弱さ
- ・イメージはできるが処理速度、巧緻性の弱さ
- ・課題の複雑さ、手順の不明瞭さ
- ・インプット（読むこと）からアウトプット（書くこと・話すこと）への未連続性

指導に生かせそうなこと

- ・自己選択（読取り、表出）機会の設定
- ・操作性のある活動（ICT 又は紙面）
- ・プロセスの明示
- ・活動の切替時間を設定

○使用する予定の ICT 機器等

・Google スライド ・Google Earth ・JamBoard ・ミライシード（ムーブノート）

○指導例

- 1 単元名・題材名「残したいもの、伝えたいもの」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
 - ・社会科ガイドブックをもとに、写真資料から必要な情報を選んでいる。（知識及び技能）
 - ・選んだ情報から、問いを考えている。（思考力、判断力、表現力等）
- 3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
5	1 あいさつ 2 前時までの学びを振り返る。 ・古くからあるものが全県で残されている。	・机上の整頓、姿勢の保持の声をかける。 ・振り返りを通して、調べる観点を確認する。



3 5	3 本時の問題に迫る。 ・本時の写真資料（補助）を読み取る。 ・PR動画について話し合う。 ・写真資料（主）を確かめる。 ・写真資料（主）について話し合う。 4 めあてを提示する。 秩父市の「人」について調べて、学習問題をつくろう。 5 人口と観光客数から、気づいたこと・疑問に感じたことなどで自分の考えを整理する。 ・グラフ（補助）を読み取る。 ・自分の考えをまとめる。 ・グループで話し合う。 6 学習課題を設定する。 ・単元の学習課題を記述する。	・写真資料：提燈祭り(久喜市)を提示する。 ◎ 提燈祭り（久喜市）のPR動画を提示する。 ◎ Jamボードまたはバズル化された写真資料を提示する。 資料：秩父夜祭(秩父市) ☆ 資料から必要な情報を読み取っている。[知・技] ・現在の秩父夜祭り（秩父市）とおおよそ30年前との写真を比較する。 ・主資料を配布する（昔と今）。 ・写真の気付きから調べることを整理する。  「いつ」「どんなこと・人」「どうして」「なぜ＝はじまり」 ・秩父市の場所を地図帳またはGoogle Earthで確認する。 ◎ ミライシード(ムーブノート)で年代を予想する。 ☆ 久喜市との比較から年代を選択している。[知・技] ・「人」の着目から、観光客・市の人口・グラフ（秩父市の高齢化率）、写真（練習風景）から学習問題を考える。 ・人口と観光客との関係を可視化する。（テープ図） ◎ 協働での学び合う時間を設定する。 ☆ 学習課題に迫る問いをもてている。[思考・判断・表現] ・学習課題設定後、学習計画の見通しを確認する。 5 7 今日の振り返りをする。 ・再度、本時の問題を確認し、振り返りの視点を明確にする。意図的に指名をし、発表を促す。 ◎ ミライシード（ムーブノート）で記入する。  8 あいさつをする。
-----	--	---

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・データを可視化し、時間や空間など社会科の見方・考え方を身に付けられるよう焦点化した。
- ・表出方法を選択できるようにし、ICTまたは紙面を用意した。

【使用した資料】取り扱った写真資料、ワークシート「ミライシード」



「久喜提燈祭り」

「久喜市PR動画」 <https://youtu.be/cCklGaX6d0o>



「久喜市の高齢化率」



「約30年前の秩父夜祭り」



「現在の秩父夜祭り」



「秩父市の高齢化率」

古くから残るもの年表

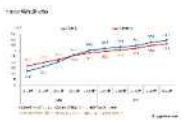
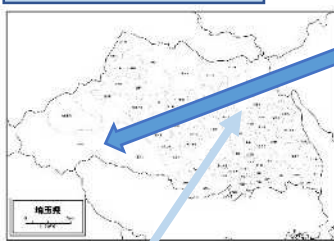
時代	江戸 (1603～1868年)	明治 (1868～1912年)	大正 (1912～1926年)	昭和 (1926～1989年)	平成 (1989～2019年)	令和 (2019～)
イメージ	さらに昔...	ひいひいおにいちゃんの子供の頃	ひいおにいちゃんの子供の頃	おにいちゃんの子供の頃	お父さんが子供の頃	みなさんが子供の頃
出来事						
いつごろだれなにどんな感じでどくら						

「年代の予想を行うためのシート」

【板書計画】

11/18 残るもの

めあて：秩父市の「人」について調べ、学習問題をつくろう。



いつ ○年前
病気から元気に！
若い人が少ない
高齢者が増える



〈約50年前〉

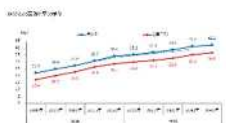
古くから残るもの年表

時代	江戸 (1603～1868年)	明治 (1868～1912年)	大正 (1912～1926年)	昭和 (1926～1989年)	平成 (1989～2019年)	令和 (2019～)
イメージ						
出来事						
いつごろだれなにどんな感じでどくら						



〈現在〉

○年前
???
???



学習問題

【背景要因から社会科（教科）における学習上の困難さの分析（一部抜粋）】

大項目	項目	実態	背景要因	読める	技能	読むこと	空間的認知	学習の中心に注意を向けること
読む	読む	文章の要点を正しく読み取ることが難しい	①情報の統合(※)が難しい	◆統計データ等の数値を読んだり、計算したりすることが苦手で、文章、年表、図表、グラフなど様々な種類の資料を活用して調べることが難しい	読むこと	計算すること		
学習面	見る	物の全体像や細部がわからない	②視覚で捉えた情報を捉えることが難しい ③物のどの部分に注目すればよいかわからない	◆空間的認知が苦手で、地図等の資料から必要な情報を見つけ出したり、白地図に書いたりすることが難しい	空間的認知	書くこと		
				◆社会科での地図やデータの読み取りなど、細かい所にも注意を向けなければならない学習が困難である	学習の中心に注意を向けること			
				◆相互の関係を理解することが苦手で、人や機関の協力、同年代の人物の関係などを考察することができない	関係性の理解すること			
				◆文字を読むことが苦手で、提示された資料から、学習課題を理解できない	読むこと			
				考えたことや選択・判断したことを適切に表現する	今回は無し			

【本校独自の社会科ガイドブック作成と活用】

資料を読み取る時の見方

①見よう	・何が見えるかな？ ・全体的に見ると？	思ったことや感じたことを書き出してみよう
②注目しよう	人 ・人の数、服、動きや仕事、 表じよう、くふうやろう もの ・色、形、大きさ、数や量、文字・数字 自ぜん ・季節、天気、ようす、山・海・川・湖などのようす	たくさん見つけて書きましよう
③くらべよう	・自分の知っていることとくらべよう ・友だちが見つけたこととくらべよう	自分が知っていることとくらべて書きましよう 友だちと同じところやちがうところを見つけてましよう
④つなげよう	・つなげて考えよう ・予想してみよう （～なのは、たぶん～だからだと思います）	友だちの考えや、自分が知っていることとつなげて考えましよう

「資料を読み取る際の見方」

進んで考えられるようになっていくために・・・問題づくり

使ってみよう。考えてみよう。下のようなことば

いつ（から）～なのだろう？
どのようになっているのだろう？
どんな～だろう？
どんな～をしているのだろう？
どのくらい～しているのだろう？
どんな工夫をしているのだろう？
だれが～しているのだろう？
どうして、～だろう？
なぜ、～だろう？



「問題づくりの際の考え方」

○授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・児童が主体的に資料と向き合い対話を始めることにつながった。
- ・児童の得意な面での支援をしたことで、学習活動の切替が円滑に行えたり、本時のめあてに迫ったりすることができた。
- ・写真資料をパズル化し、JamBoardを活用したことで、教師から読み取る視点を投げかけなくても、資料の細部と全体とに注目して自分の考えをもてるようになった。
- ・総括的な評価の1つで実施したワークテストで、学級平均以上の点数を獲得し自信につながった。

○今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・表出方法の選択幅を広げ、個人又は学習集団に提供していく（音声得意、書字困難なら音声入力など）。
- ・ICTとアナログの双方の使用のタイミングを適切に判断し、児童たち自らが学び方を調整できるようにさらなる綿密な準備をしていく。例えば、「Google ドキュメント」「※ムーブノート」「紙面(ノート)」の記録方法を設けるなど。※ムーブノート（オンラインでワークシートを共有できる学習システム（ベネッセ））
- ・教科分析とともに、困難さへの支援と長所を生かす支援の双方での指導と支援を行っていく。

実践事例(4) 小学校 特別支援学級

○項目

学習面「書く」

○実態区分

読みにくい字を書く

■ 事例 文字を書くのに時間がかかる小学3年生

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・力を入れて書くこと
- ・板書が、ゆっくりになってしまう
- ・集中する時間が短い

強みや得意なこと

- ・知識が豊富
- ・何事にも一生懸命に取り組むことができる
- ・とても素直な性格である

考えられる背景

- ・目と手の協調運動が苦手
- ・不器用さがある
- ・筆圧が弱い

指導に生かせそうなこと

- ・タブレットの扱いが得意である
- ・コツコツがんばろうとできる

○使用する予定の ICT 機器等

- ・WAVES（学研）…『見る力』を育てるビジョン・アセスメント「WAVES」
- ・iPad

○指導例

1 題材名

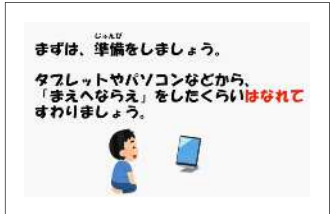
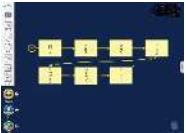
「目と手を使って」

2 本時（本活動）の学習（個人目標）

- ・目と手を協応させて、身体・手先を動かしたり、書いたりすることができる。

3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例 ○児童の活動
5	1 あいさつ	○気持ちを落ち着けて挨拶をする。
	2 本時の予定の確認	○自分の予定を確認する。 ・グループに分かれることを伝える。

7	3 粗大運動 「エビカニボックス」 ※課題別のグループに分かれる。	○ＴＶを見ながら「エビカニボックス」のダンスを元気に踊る。 ・楽しく踊れるように、上手な動きを褒め盛り上げる。 ・動きのポイントを伝えるようにする。
1 5	4 目の運動 「ビジョントレーニング」 「ぼいぼいレース」 「見て書く」 ※3人で交代する。	○iPadの動画、WAVESを行う。 ◎「ビジョントレーニング」…動画を見て、目の運動をする。  
1 5	5 手仕事	◎「ぼいぼいレース」…WAVESで目と手を協応させる。 ◎「見て書く」…動画を見て、一定時間内に平仮名の書き取りを行う。   ・集中できるように、机の場所を配慮する。 ・できるだけスムーズに進められるよう、それぞれの場所にiPadを設置する方法にする。 ○スプレットシートの中の個別の課題を確認し準備する。 A 豆つかみ B 安全ピン C クリップ 等（変更有） 指先を多く使った作業を行うようにする。 
3	6 ふりかえり 7 あいさつ	○本時頑張ったことを自分で答える。 ・それぞれの頑張っていたところを褒めるようにする。 ○挨拶をする。 ・グループで終わりにする。

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・短い活動を組み合わせて一時間を形成し、集中力が保てるようにする。
- ・できたことを、その場で認め、褒めるようにする。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・I C Tを使うことで、児童の意欲が膨らみ、集中して活動していた。
- ・自分で準備し、自分で進めるなど、主体的な活動ができている。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

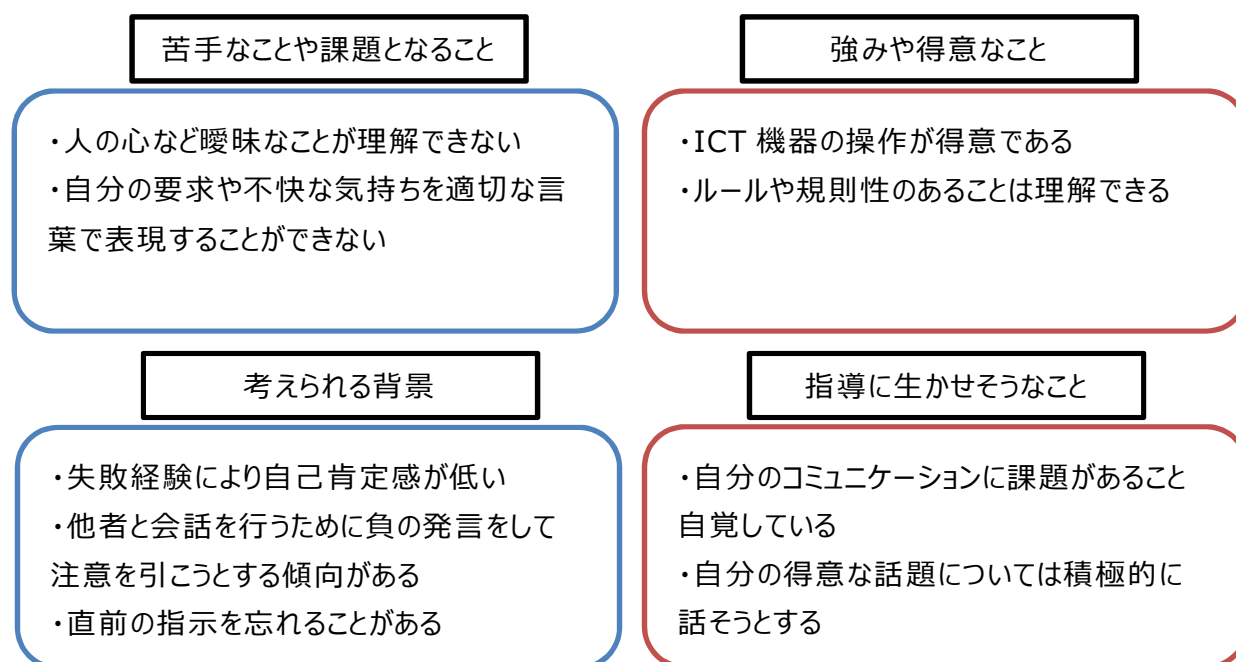
- ・動画の視聴によるビジョントレーニングもよいが、マンネリ化してしまう危険もある。児童が選択して活動できるものや、主体的に学べるなども取り入れていきたい。
- ・『書く』ことのゴールをどこにするかを考えて行く必要がある。
- ・友達の関わり合いの活動を取り入れることで、意欲が増すと共に、ICTを活用する力を伸ばすことができる。

実践事例(5) 中学校 特別支援学級

- 項目 学習面「見る」 ○実態区分 周囲の状況や人の表情などがわからない、わかりにくい

■ 事例「暗黙の了解」を読み取ることが苦手な生徒

○実態（学校での様子）



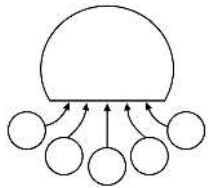
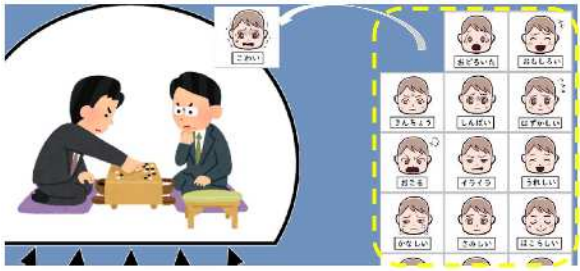
○使用する予定の ICT 機器等

- ・タブレット PC (Chrome OS)、電子黒板
- ・Jamboard ※デジタルホワイトボード (Google)

○指導例

- 1 単元名・題材名 自立活動「相手の思いを読み取ろう」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
 - ・イラストから暗黙の了解について知り、考をまとめることができる。〔3－（2）〕
- 3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
5	・はじめのあいさつ ・本時の確認	・軽く腰を曲げた姿勢で挨拶ができる。 ・本時の見通しが持てるように、Classroomで本時の流れを確認する。

10	展開 1 ・SST動画⁽¹⁾から「予定が重なってしまったときの対応」について考える。	・SST動画では、生徒の生活場面と関連させて、理解させる。 ◎Youtubeの動画を視聴し、理解に時間がかかるようであれば、一時停止や再生速度を調整する。
15	展開 2 ・支援籍学習の生徒に対する暗黙の了解を考える。	◎Jamboardで相手に合わせた関わり方を考える。 ◎Jamboardに貼り付けたシンキングツールを使用する。 
15	展開 3 ・囲碁のイラストから暗黙の了解を考える。 ・イラストカードから気持ちのカードを選択することができる。	◎囲碁の対局に当てはまる気持ちを選択させる。 
5	・学習の振り返り ・終わりのあいさつ	・今日の学習の振り返りをし、努力したことや頑張ったことについて気付かせ、自信を持たせる。

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・展開 1 のSSTの理解において、3 分程度の動画を使用した。本動画は、統一された動画構成（説明→悪い例→良い例→まとめ）となっているため、集中して視聴することができる。
- ・他の刺激に気が移りやすい傾向があることから、展開 2 においてシンキングツールを使用した。頭の中にある考えを視覚的に表現しやすく、思考が拡散しにくいように配慮した。
- ・展開 3 において、イラストの場面に合った気持ちを考察させた。気持ちを選択しやすいように、Jamboard上に気持ちのイラストを分割して貼り付けておき、スライドするだけで該当する気持ちを考えられるようにした。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・ICTは、「書くこと」「読むこと」ことへの労力を減らすことができるため、思考する時間を確保しやすい。授業展開をできるだけ統一し、生徒がICTを使うタイミングを多くの教科で同じにすることで、集中が持続しやすい授業になると考える。
- ・生徒 1 名だけのGoogle Classroomを作成して、「めあての確認」、「学習内容をコメント欄に投稿」、「Jamboardの活用」などを行った。生徒自身が過去の投稿を読み返す姿を見ることができた。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・認知のゆがみを軽減することは、安定した心理状態で、穏やかな日常を送るための基盤となる。今後は、ICTを活用した「認知行動療法」に関する実践を行っていききたい。そして、認知のゆがみを軽減するためのワークシートをクラウドで共有することで、多くの教員が困難さを抱えた生徒に対応することができると思う。

参考文献

- （1）コドモの味方SSTチャンネル “【SST（ソーシャルスキルトレーニング）動画】「予定の調整の仕方」（小学校高学年～）”.Youtube. <<https://youtu.be/AbSQDMRoMYc>>（参照日2023年1月10日）.

実践事例(6) 高等学校 通常の学級

○項目

行動面「生活」

○実態区分

課題に集中し続けることが難しい

■ 事例 全体で発表することが苦手である生徒

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

・間違えることを気にして、全体で発表する
事に対し苦手意識を持っている

強みや得意なこと

・問題に対して取り組む姿勢や考えようとする
姿勢がある
・他者の解答を見て自分の解答と照らし合
わせができる

考えられる背景

・全体の前で間違えることが気になる
・問いに対して、必ず正答を答えなければな
らないと考えている

指導に生かせそうなこと

・自分の持っている ICT 機器を使用するた
め、使い方に困らない
・ICT 機器を使用することに対して興味、
関心を持っている

○使用する予定の ICT 機器等

- ・生徒が所持している ICT 機器(スマートフォン等)
- ・ツールは「Google Classroom」※
※クラス単位で生徒の学習内容を管理、運営ができるオンライン学習システム

○指導例

1 単元名・題材名「ICT 機器を使用した課題提出」

2 学習（個人目標）

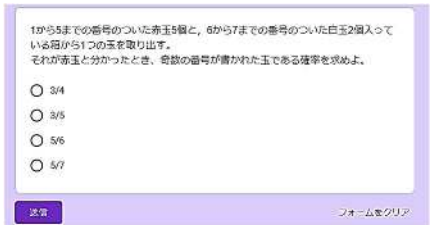
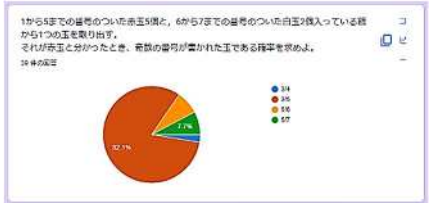
- ・課題の提出。
- ・自分の解答と他者の解答を比較し、考察する。

3 出題課題

「1 から 5 までの番号のついた赤玉 5 個と、6 から 7 までの番号のついた白玉 2 個入っている箱か
ら 1 つの玉を取り出す。それが赤玉であると分かったとき、奇数の番号が書かれた玉である確率を
求めよ。」

選択肢：① $3/4$, ② $3/5$, ③ $5/6$, ④ $5/7$

4 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
	1 「Google Classroom」を使用して課題を提示する。 2 問題に取り組む。 解答は選択式。 3 生徒が解答した選択肢の人数や割合を提示する。 4 自分の解答と他者の解答を比較し、考察する。	・課題を提示する日時等をあらかじめ周知しておく。 ◎「Google Classroom」を開き問題に解答する。 ・計算等は自分のノート等に行い、解答のみ選択肢から解答する。  ◎全員の解答結果を提示する。  ・正答は伝えず、解答の割合を見て自分の解答と他者の解答を比較し、考察する。

5 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・どの解答を選択したかは他者に見えない。（解答に自信がなくても答えることができる。）
- ・生徒は、最も高い割合の解答が正答であると予測する。
- ・自分が解答した選択肢以外にも解答について、なぜその解答になったのか考察させる。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

・自分の解答が他者に見えないので、間違いを気にせず回答ができる様子であった。選択肢が付いているため数学が苦手な生徒に対しても答えやすい内容となっている。ICT機器を使用することで、どの生徒も興味関心を持って取り組んでいた印象があった。

良かった点…◎，改善点…▲

- ◎解答が他者に見えないので、間違いを気にせず回答ができる。
- ◎学校や自宅、電車内など場所を選ばず回答ができる。
- ▲自分が選択しなかった他の解答について、考察できているか確認できていない。
- ▲「正答がわからないと不安である」と生徒から意見が出た。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

『普段の授業で今回のやり方を取り入れる』

- ① 生徒に課題を提示し、ICT機器を使用して解答の予想をさせる。
- ② 回答割合を提示してすべての解答についてグループで考察を行う（全ての解答について考察するため、誤った解答を選んだ生徒も話し合いで意見を出しやすい）。
- ③ 再度、回答させ1つの選択肢が100%になれば全員が考察・理解できたと判断できる。

実践事例(7) 特別支援学校 中学部

○項目 行動面「生活」 ○実態区分 気持ちの切り替え、自分をコントロールすることが苦手である

■ 事例 はっきりした指示が無いと行動することが難しい生徒

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・見通しや理解ができたとしても、実行機能に難しさがある
- ・尿意や便意があっても、大人からの指示が無いと、行動に移すことが難しい

強みや得意なこと

- ・iPad のタップなどの操作ができる
- ・指示がわかりやすく理解できると、素早く行動できる
- ・係活動や教員の手伝いでは頼りになる

考えられる背景

- ・見通しを立てたり、気持ちを切り替えたりすることが苦手である
- ・失敗や修正を回避したい気持ちが強い

指導に生かせそうなこと

- ・教員の模倣ができる
- ・嬉しい時や美味しい時にも発声が多くなるが、何をしたら良いかわからない時にも、発声が大きく多くなる

○使用する予定の ICT 機器等

- ・タブレット端末（iPad）
 - ・アプリ等（※Drop Talk）
- ※Drop Talk…話し言葉でのコミュニケーションを苦手とする、自閉症や言語障害のある方のコミュニケーションを助ける ACC【補助代替コミュニケーション】ソフトウェア
(参考：Drop Talk サイト)

○指導例

- 1 単元名・題材名 日常生活の指導「給食」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
 - ・音声指示が難しい給食中でも、iPad でやりとりをして行動する。
 - ・はっきりした指示が無いと増えてしまう、手づかみを減らして食べる。

3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
12:00	1 トイレへ行く 2 エプロンをする 3 台拭き 4 水筒を取って配膳を待つ	・立ち便器で排尿なので、トイレカードを使用して生徒 1 人で行く。 ◎教員が操作→教員の模倣をして操作→行動の基本パターンを繰り返す。 iPadだけでは難しい時には、サイン等でやりとり→それでも難しい場合は、教員がマスクをして近づいて指導する。 
12:15	5 給食を取りに行く。 6 いただきます 7 マスクをはずす 8 はし 9 ごはん（パン、うどん） 10 するもの 11 おかず（デザート） 12 教員が食べ終わのを待つ 13 牛乳を飲む	・食べ始めに手づかみをしてしまうことが多いので、気をつける。 ◎タイマーを動かして、主食、汁物、おかずを交代しながら食べられるようにする。 ・牛乳は吸うのではなく吹いてしまうことがあるので、教員が近くへ行つて最後に飲むことにしている。 
12:30	14 マスクをする 15 ごちそうさまでした 16 かたづけ 17 エプロンをはずす 18 トイレへ行く	・マスクが汚れている場合には、連絡帳袋を指さして交換のサインをする。 ・食事後に排便することがあるので、一緒に行って洋式に座るのを確認する。 

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・教員からの提示だけだと、コミュニケーションが一方的なので、2 台でやりとりをすることにした。
- ・教室へ入ることが難しい生徒には、Zoomを使って、食べているのを見せて誘っている。
- ・通常学級でもマスクをしたり、距離を取ったりすることが難しい状況であれば、機械音声によるやりとりも有効ではないか。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・絵カードやサインよりも、操作や音声、視覚効果もあって、生徒が行動しやすい。
- ・「指示が無いと行動できない」という教員側の発想よりも、「きっかけ」があれば行動できるという生徒側の発想が大切である。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・アナログで難しかったことを、デジタル化して効果を高めたが、定着した段階でスクリーンショットしてラミネートカードにするなど、再びアナログ化して、家庭や教員が替わっても取り組めるように般化していく。

実践事例(8) 特別支援学校 中学部

○項目 行動面「人とのかわり」

○実態区分

言葉を上手く使えない

■ 事例 自分の考えを伝えることに課題のある対象生徒 A

○実態（学校での様子）

苦手なことや課題となること

- ・自分の意見を他者に伝えることが難しい
- ・教室に入室することが難しく、学校を定期的に欠席する

強みや得意なこと

- ・タブレット端末をはじめとした ICT 機器への興味関心が高く、操作も概ね一人で行える

考えられる背景

- ・自分の意見が受け入れられるかということへの不安感が高い

指導に生かせそうなこと

- ・タブレット端末の操作
- ・信頼する友達・教員と少人数のグループであれば、前向きに活動に取り組むことができる

○使用する予定の ICT 機器等

- ・iPad
 - ・「Keynote」※プレゼンテーションソフト（apple）
 - ・「ZOOM」（zoom）※
 - ・「Teams」（Microsoft）※
- ※web 会議システム

○指導例

- 1 単元名・題材名「物語の動画を作ろう！」
- 2 本時（本活動）の学習（個人目標）
 - ・友達や教員と相談しながら活動を行うことができる
 - ・タブレット端末で動画を作成することができる

3 展開（または指導例）

時	主な学習活動	・指導上の留意点 ◎ICT活用例
	1 あいさつ 2 本時の内容の確認 ・それぞれ担当となっているシーンの確認 ・担当のシーンの動画を作る	◎ZOOMで中継することで教室に入室しなくても参加できるようにする。 ◎Keynoteを使用して活動内容などを提示する ◎前時までの取組を、それぞれの画面を共有して確認する
	3 それぞれ担当となっている部分の動画を作る ・必要な画像をインターネットで検索・保存する ・Keynoteのマジックムーブを使用して動画を制作する	・動画の編集方法については資料を確認できるようにしておく。 ◎作成中・完成したデータを適宜Teamsなどで共有することでお互いに確認したりコメントしたりできるようにする  ※Keynoteの編集画面 画像を組み合わせて 動画を制作する  ※Teamsの「ファイル」 昨日を用いて画像や 動画のデータを共有する
	4 振り返り・まとめ 5 あいさつ	◎お互いのデータをTeamsで共有し、組み合わせて一つの作品とする。 ◎感想や質問などをZOOMやTeamsのメッセージ機能で共有できるようにする。

4 指導（支援）のポイントや配慮したこと（周囲の児童生徒への配慮等）

- ・教室に入室しなくても活動を行えるようにした。
- ・自分の意見を音声による言葉ではなく、メッセージ（文字やスタンプ・画像など）で伝えられるようにした。

○ 授業を振り返って（ICTを活用したことによる変容）

- ・生徒の興味・関心を引くことができ、活動への意欲が増したことで、オンライン上で授業へ参加することができるようになった。

○ 今後の展望（今後こういう実践をしていきたい等）

- ・異なる授業場面でもZOOMやTeamsを使用することで、意思疎通を図るとともに、データのやりとりもインターネット上で行うことで、生徒の学習時間を確保していきたい。

IV 講評

国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部 主任研究員 織田 晃嘉

令和4年12月に発表された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」にあるように通常の学級にも学習面や行動面で困難さを示す児童生徒は少なからず在籍していますが、多くは特別な教育的支援が必要と判断されない状況にあります。本調査研究では、「通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒への支援を研究し、教員の資質向上とともに、特別な教育的ニーズのある児童生徒の学びを支えることを目指して」いることは、学校現場の喫緊の課題に対応するための意義のあるものです。また、通常の学級以外の学びの場でもある特別支援学校・特別支援学級・通級指導教室における実践についての調査研究も行っています。小学校・中学校・高等学校という12年間の縦の連続性、通常の学級・通級指導教室・特別支援学級・特別支援学校という横の連続性、学習や生活に困難を有する児童生徒の連続性のある学びの場全体を視野に入れて調査研究に取り組まれたことは非常に価値のある取組であります。



そして本調査研究はその目的として

「（１）教員が、ICT を効果的に活用して、学習や生活における児童生徒の特別な教育的ニーズを把握し、一人一人の潜在的な能力を伸ばすことのできる学習等支援プログラムを開発していく。」

「（２）特別支援教育に携わる教員に向けて、ICT 機器を効果的に活用し、自身の資質向上につながる学習等支援プログラムとなるよう、実践、改良し、広く発信していく。」

の2点を挙げられています。

GIGAスクール構想においては「特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する」とされ、「教育の情報化の手引き」にも「コンピュータや情報通信ネットワークなどのICTは、特別な支援を必要とする児童生徒に対して、その障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて活用することにより、学習上又は生活上の困難を改善・克服させ、指導の効果を高めることができる重要な手段である。」とあるように、今日的な教育課題の一つである特別な教育的ニーズのある児童生徒の資質・能力を育成する教育環境の実現を目指す本調査研究は非常に意義のあるものであると言えます。

目的（２）と関連して作成された「彩の国みんなのみかたプログラム」も本調査研究の大きな成果の一つです。このプログラムの特徴としては、児童生徒の実態を入り口に、その背景や要因を考えてから支援策と支援のポイントを提示するということにあります。まず支援策を提示するとハウツーに陥る危険性があります。児童生徒のつまずきの要因を考えると、どのような支援策が適しているかを適切に理解することができます。プログラムが児童生徒の困難さを解決するだけではなく、教員「自身の資質向上につながる」ように設計されていることは高く評価できる点です。また、「彩の国みんなのみかたプログラム」は県内限定公開ではなく、インターネットを通じて全国に広く公開されると聞いています。広く公開することは全国の教員の指導力・支援力の向上につながることはもちろんですが、プログラムへの意見を広く集めることが可能となり今後の内容の改善に大きく資するものと思われます。公開後もプログラムの更新・改善を進められていくと聞いていますので、今後のますますの充実が期待されます。

次に「彩の国みんなのみかたプログラム」を活用する場合に留意しておくべき点を述べさせていただきます。すべて調査研究においては確認された成果に含まれることでもあります。調査研究の成果であるプログラムを十分に活用するために必要な視点と考えています。

1 「教科指導の視点」と「自立活動の視点」

「特別支援教育における ICT の活用について」には特別支援教育における ICT 活用の視点として「視点1 教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするために、ICTを活用する視点」「視点2 障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために、ICTを活用する視点」が挙げられています。児童生徒の困難さの改善・克服は自立活動の視点でもあり、当然必要な視点ですが、改善・克服ばかりに注目してしまうと、教科指導の効果を高めるという視点が弱まってしまいう危険性があります。特に通常の学級での活用においては基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させるための重点的な指導のために ICT を活用することが求められてきます。教科指導の視点と自立活動の視点、双方の視点を持って指導や支援に取り組むことが、個別最適な学びや協働的な学びにもつながっていきます。また、特別支援学級や特別支援学校においても教科指導の効果を高めるために通常の学級での指導・支援には参考となるところも多いです。お互いに学びあうことが教員の指導力・支援力の向上にもつながっていきます。

2 「弱み」と「強み」

児童生徒の実態から要因を把握、支援策を考えていくことは、児童生徒の困難さを軽減するためには非常に有効な手法ですが、とすれば「弱み」に焦点が当たりすぎてしまう場合もあります。児童生徒の潜在的な能力を伸ばすためには、その児童生徒の「強み」を生かすことも重要になってきます。ICT 機器の活用に限らず、指導・支援を行う際には「強み」を活かしていくことにも留意してください。「強み」を生かす指導・支援は学習や生活に困難さを持つ児童生徒のみならず全ての児童生徒にとって必要なものです。学習や生活に困難さのある児童生徒の指導や支援を通じて全ての児童生徒にとっての個別最適な学びとはどのようなものであるかを考え、より充実した指導・支援の実現を目指していただければ幸いです。

参考資料

「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
(文部科学省)

https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf

「GIGA スクール 構想の実現へ」(文部科学省)

https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf

「教育の情報化の手引き追補版」第1章(文部科学省)

https://www.mext.go.jp/content/20200608-mxt_jogai01-000003284_002.pdf

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)【概要】(文部科学省)

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf

「特別支援教育における ICT の活用について」(文部科学省)

https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_18.pdf

V 研究のまとめ

1 研究を振り返って

(1) 理論研究から

国の動向及び最新情報をはじめ、「埼玉県特別支援教育環境整備計画」（令和元年度から令和3年度）等、埼玉県の取組、また先行研究に係る概要等を整理した。ICT機器活用の推進と通常の学級における特別な配慮を必要とする児童生徒への指導及び支援の充実における一助となるよう取り組んできた。

「彩の国」である埼玉県には「ほんとうのわたしを見つけて Ver.2」（H17.県立総合教育センター）や「理解と支援のための知恵袋」（H19.県教育局特別支援教育課）等の長年活用されている研究成果物がある。その研究の良さを共有しながら、本研究ではICT機器を活用し、「誰もがどこでもアクセスできること」、「単なるアプリの紹介ではなく活用することで資質向上につながることを目指し取り組んだ。2年間で様々な先行研究や文献から学ぶ過程で、研究の輪郭が徐々に細部へと深化するようになった。

「彩の国みんなのみかたプログラム」の作成に向けては、文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の項目を基に整理をした。その過程では国立特別支援教育総合研究所の研究員、調査研究協力委員の皆様にも御意見をいただきながら、プログラムの柱立てや項目、実態等を作成した（詳細は「プログラムの構造 p6～」参照）。また、具体的な支援策についても、アンケートだけでなく、様々な文献から幅広く情報を集め、プログラムに反映している。

(2) 調査研究について

○令和3年度は「ICTを活用し現在どのように取り組んでいるか」の具体的な活用例や「今後どのように活用していきたいか」について調査・整理しプログラムに反映させた。調査結果から、各市町村や各校でICTが導入され、活用自体は進んできているという状況が見られた。一方、ICT機器を活用した効果的な支援策等の情報が収集できたものの、学校や教員が情報を共有できていない現状も見られた。また「ICT機器は便利だから」と即効性のある解決策を求める教員の回答も見られたことから、プログラムでは、背景要因を含めながら様々な学校での取組や支援策について紹介、共有できるようにすることが重要であることが示唆された。



○令和4年度は「彩の国みんなのみかたプログラム」の試行版を、主に通常の学級の先生方を対象に試行してもらい、「特別なニーズのある児童生徒の支援に役立つと感じた点」、また「今後より多くの先生方が活用しやすくなるには、どのように改善していくと良いのか」等を調査・整理し、本プログラムに反映させた。Google フォームを用いて、即時的に研究協力委員と情報が共有され、プログラムの改良に生かすことができた。また、支援策も「デジタルだけ」と限定するのではなく、実態に応じて絵カードのようなアナログの教材の良さも生かし、ベストミックスしていくことが重要であると研究協力委員と共通理解をした。

(3) 授業実践

プログラムと実践を結び付けられるよう、2年間、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の研究協力委員による授業実践を8事例ずつ実施した。令和3年度のスーパーバイザーの国立特別支援教育総合研究所 青木高光 主任研究員から、「プログラムをより具体的な実践へと結び付けるために、

具体的な事例を収集することが重要性である。」と御指導いただいた。日常の指導や支援に生かされる『結び目』となるように実践事例をプログラムに即して集めることとしている。

2 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

「彩の国みんなのみかたプログラム」を活用したり実践事例から学んだりすることで、教員が児童生徒のつまずきの背景要因等を考えることができる。

「このような理由もあったのか。」という教員の気づきにより、多面的に「見方」を変えることができる。その過程で支援を柔軟に幅広く考えることができる。

「彩の国みんなのみかたプログラム」は「見方」を変えることにより、教員の資質向上にもつながり、児童生徒にも寄り添うことにもなる。それは、教員、児童生徒、「みんなの味方」になる、と考えている。

また、授業実践がプログラムと実践の「結び目」となるとともに、その過程で研究協力委員も互いに学びが深まったことが最後の調査研究協力委員会でも感じられた。

以下は調査研究協力委員から出た研究の成果についての意見をまとめる。

- ・ICT を使ってなにができるか、先生方の知恵で子供たちの笑顔が見られるようになった。様々な先生方の貴重な情報を共有していきたい。
- ・見方が変わると面白い、とも感じた。通常の学級では ICT 機器の活用が目的になってしまうことがある。困っている先生がたくさんいるので還元していきたい。
- ・プログラムのニーズは高まっており、この研究に関わってありがたい。これからどう広めていくかが課題だと思う。今後も精いっぱいやっていきたい。
- ・ICT を使うことが苦手だったが、実際にやってみて学習意欲が高まっていると感じた。適切に使えるよう先生方に伝えていきたい。
- ・特別支援教育に対し、受け身の先生がまだ多いので、変えていきたいと思っている。
- ・段階に応じて使っていく、支援が本人の自立を妨げてしまうことのないように教員が現場で考えていくものとしてツールになればよい。
- ・今回は困難さに目を向けたが、得意なことをどう伸ばしていくかも頑張りたい。
- ・勤務している市は ICT 機器の活用が進んでいるといわれプレッシャーだったが、自分を振り返る良い機会だった。このプログラムは子供に寄り添っているので広めていきたい。
- ・コロナが始まって 1 人 1 台 ICT 機器を使うようになりつつある。校種を越えて授業を見学できたこと、学校文化が違うので自分の中でミックスできたことが良かった。
- ・高等学校でも取り組んでいきたい。高等学校でも一人 1 台となるので、広めていきたい。
- ・普通高校に来ている生徒も個別に支援が必要な生徒がいる。どう活用していくか、自分の立場で広めていければよいと思う。高校にもこのプログラムを広めていきたい。
- ・「個別最適な学び」と言われているが、ここにあるのかなと再認識できた。
- ・10 年前には、こんな世界が来るとは思わなかった。10 年後、このプログラムがどのようなになっているだろうか。よりよいものができるよう研究を進めていきたい。
- ・子供の可能性、先生方の可能性、みんなで作り上げることで可能性が広がっていく。
- ・私たち自身も伸びていくところがある。校種を越えてつながっていったことは貴重である。



2年間、互いに授業実践やプログラムについて考え、授業実践を見合うことで、委員自身も学び合うことができたと感じていることを感じた。何人かの委員から「きっかけ」という言葉が出たように、本プログラムを活用することで、児童生徒の行動や困難さには背景要因があることを考える「見方」が変わるきっかけになることにもつながると良いと考える。教員が能動的に、自律的に活用できるようになると、より可能性は広がっていきと考えられる。

国立特別支援教育総合研究所の主任研究員 情報・支援部 織田 晃嘉様からは最終回の調査研究協力委員会にてこのような講評をいただいた（講評はP36～）。

「小学校・中学校・高等学校という「縦」と通常の学級・通級指導教室・特別支援学級・特別支援学校という「横」の連続性、学習や生活に困難を有する児童生徒の連続性のある学びの場全体を視野に入れて調査研究に取り組まれたことは非常に価値がある。

また、活用の場面を特定せず、子供に焦点を合わせているところが、これからも役立つ視点であると思う。ICT機器をどの子も学びやすい形で、個でも全体でも使える様子を、授業視察でも見せていただいた。協議で、「視察に行った先生方の方法を取り入れている」という話があったが、研究を2年間行ったからこそ、非常にいい形で進んだと思っている。

このプログラムが具体的な支援の「きっかけ」となり、教員が自分自身で「うちの学校では」と考えることができるというのが重要である。支援会議等でも活用が可能であると考えられる。

サイトの公開後もブラッシュアップしていくとのことで、更新や改善を期待している。

本プログラムはサイト上で公開することから、県内外の先生方にも活用してもらうことができる。これはICT機器活用の大きな利点であると考えられる。

多くの教員や子供に寄り添っていけるよう、研究成果を発信していきたい。

（２）今後の課題

最終報告書及び「彩の国みんなのみかたプログラム」の発信

2年間の研究をまとめた最終報告書及び「彩の国みんなのみかたプログラム」を学校現場で活用されるよう、発信することが今後の課題となる。調査研究協力委員に共通した思いであった。



どこからもアクセスできることがICTの利点でもあるといえる。ホームページでの発信の他、研修での活用など様々な機会を通じて広めていく必要がある。

通常の学級の教員も手に取りやすいよう「取扱説明書」も作成したことから、研修等でも配布をし、発信していきたい。

本プログラムが「便利な情報が集まったツール」と取り扱われるのみにならないように啓発していく必要がある。児童生徒の課題や問題行動に対し背景要因を考え、適切な支援について、教員が自分で考えていくという過程で資質向上につながるということを伝えていきたい。

本プログラムは児童生徒の困難さを出発点に、背景要因、支援策へとつなげている。実践事例には「強みや得意なこと」を生かし、「支援に生かす」ことを掲載しているが、改めて「強み」を生かす視点の重要性も織田先生から御指導いただいた。その視点も併せて周知していくことが重要である。

本プログラムは公開後も、Google フォーム等を活用し、要望等を挙げてもらうことでブラッシュアップしていくことを考えている。

教員や子供の「味方」となることで、どの子も自分の力を存分に発揮できるようになることが本当の成果である。未来を創る子供たちの笑顔が増えるように、本研究の活用を力強く発信していきたい。

VI 資料1 学習等支援プログラム（仮）試行アンケート

1 令和4年度「特別支援教育におけるICT機器の効果的な活用に関する調査研究」 【学習等支援プログラム（仮）試行アンケート】

本研究は、先生方が、ICT を効果的に活用して、学習や生活における児童生徒の教育的ニーズを把握し、一人一人の潜在的な能力を伸ばすことのできる学習等支援プログラムを開発し、その報告書を作成し、広く発信することを目的としています。

そこで、本アンケート調査では、現在作成している暫定版の学習等支援プログラムを主に通常の学級の先生方を対象に試行して頂き、特別なニーズのある児童生徒の支援に役立つと感じた点、また今後より多くの先生方が活用しやすくなるにはどのように改善するかをお聞きます。

（※このアンケートは、貴校及び貴職の取組を評価するものではありません。）

本アンケートについて

・質問は、大きく以下の3つで構成されています。

1 回答者自身について

2 プログラムを試行しての感想（良かった点、今後こうしてほしいという要望等）

3 プログラムを試行しての評価

・回答時間は、約10分です。

・アンケートは、個人や学校を特定して分析するものではありません。なお、この調査の結果は、本研究で活用させていただくほか、当センターの研修事業の見直し等にも活用させていただきます。

新しい時代の特別支援教育のために、御理解・御協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

・回答は、お一人1回のみお答えください。御協力をお願いします。

I 現在の勤務の状況にあてはまるものを選んでください。

1 ☐ 小学校・中学校

2 ☐ 通常の学級 ☐ 特別支援学級 ☐ 通級指導教室

→ 特別支援学級

1 つだけマークしてください。

☐ 知的障害 ☐ 肢体不自由 ☐ 身体虚弱 ☐ 難聴 ☐ 言語障害 ☐ 自閉症・情緒障害

→ 通級指導教室

1 つだけマークしてください。

☐ 難聴・言語障害 ☐ 発達・情緒障害

II 学習等支援プログラム（仮）はどの分野に「困り感のある」児童生徒に活用しましたか？

→ 学習面

どの項目を選びましたか

当てはまるものをすべて選択してください。

☐ 書くことが苦手 ☐ 読むことが苦手 ☐ 話すことが苦手 ☐ 聞くことが苦手 ☐ 見るのが苦手

プログラムを体験してみて良かった点はどこですか？

自由記述

→ 行動面

当てはまるものをすべて選択してください。

☐ 生活 ☐ 人とのかわり

VI 資料1 学習等支援プログラム（仮）試行アンケート

Ⅲ 学習等支援プログラム（仮）についての評価

効果があったと感じますか？

そう思わない 1 2 3 4 そう思う

学習等支援プログラム（仮）の評価の理由を御記入ください。

自由記述

Ⅳ プログラムを体験してみてこうだったら良いと思うところがありましたら御記入ください。

御協力有難うございました。皆様の御意見を生かし、今後も学習等支援プログラムの改良し、多くの先生方の味方となるようなプログラムにして参ります。

プログラム試行アンケート回答フォーム

<https://forms.gle/U9Q1Yj2xyuxuKkk79>



皆さんの意見をお聞かせください。
(回答は何度して頂いても構いません。)

※Googleform で作成し、調査研究協力委員と結果を共有し、即時にプログラムの改良へ生かせるようにした。

VI 資料2 授業視察参観シート

特別支援教育担当 調査研究 授業視察参観シート

月 日 () 学校名 授業者 (先生)
記入者 (所属 () ())

① 特別な教育的ニーズ（抽出児童生徒の実態について気付いたこと）

② 実態把握（当日の児童生徒の様子等から気付いたこと）

③ 使用していた ICT 機器等（ICT 以外の教材・教具も含む）

④ 本日の授業について 参観して気付いたことや感想等を具体的に記述してください

⑤ 今後の研究に生かせそうなこと（効果的であったと感じた支援等）

VI 資料 3 参考・引用文献

研究を進めるに当たり、令和 3 年から 4 年にかけて、以下の資料及び文献等を主に参考にした。

- ・文部科学省（平成 29 年・平成 30 年告示）学習指導要領。
- ・文部科学省（令和 3 年 1 月）「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」。
- ・文部科学省（令和 3 年 6 月）「障害のある子供の教育支援の手引」。
- ・文部科学省（令和元年）「教育の情報化に関する手引」。
- ・文部科学省（令和 2 年）「教育の情報化に関する手引」補追版。
- ・文部科学省（令和 3 年度）「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」有識者会議資料。
- ・中央教育審議会答申（令和 3 年 1 月）「令和の日本型教育の構築を目指して」。
- ・デジタル庁・総務省・文科省・経産省（令和 3 年 9 月 3 日）「GIGA スクール構想に関する教育関係者へのアンケートの結果及び今後の方向性について」。
- ・埼玉県立総合教育センター（平成 17 年 3 月）「一人一人の教育的ニーズに応じた支援の在り方に関する調査研究」〈ほんとうのわたしを見つけて Ver.2（認知・行動評価表）〉
- ・埼玉県教育委員会（平成 19 年 3 月）「理解と支援のための知恵袋」～教室で困っている子どもたちと先生のために～。
- ・埼玉県教育委員会（平成 31 年 3 月）「埼玉県特別支援教育環境整備計画」。
- ・埼玉県教育委員会（令和 4 年 3 月）「埼玉県特別支援教育推進計画」。
- ・埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課長 八田聡史（令和 2 年 7 月）「新型コロナウイルスによる学校教育への影響と GIGA スクール構想について」（「埼玉教育」）。
- ・埼玉県立総合教育センター（平成 26 年度）「特別支援教育における ICT 活用～ICT を活用した分かる授業づくりを目指して～」。
- ・埼玉県立総合教育センター（平成 24 年度）小中高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究（最終報告）。
- ・障害者の権利に関する条約。
- ・障害者基本法。
- ・障害者差別解消法。
- ・中央教育審議会（平成 28 年 12 月）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）。
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成 26・27 年度）C-94「専門研究 A 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究」。
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成 30 年 1 月）第 3 回障害者 SWG「特別支援教育における ICT 活用についての情報提供」。
- ・文部科学省（平成 18 年 7 月 18 日）「特別支援教育の推進のための学校教育法等の一部改正について（通知）」。
- ・文部科学省（平成 19 年 4 月）「特別支援教育の推進について（通知）」。
- ・文部科学省（平成 24 年 12 月）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」。
- ・文部科学省（令和 2 年 3 月 19 日）令和元年度補正予算「GIGA スクール構想の実現」に関する説明資料（情報提供）。
- ・文部科学省（令和 2 年 9 月）「各教科等における ICT の効果的な活用について」。
- ・文部科学省（令和 3 年）「GIGA スクール構想に関するこれまでの主な留意事項の全体像①」。
- ・文部科学省（令和 3 年）「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議（基礎資料）」。
- ・文部科学省（令和 3 年 1 月）「ICT を活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実委託要項」。

- ・文部科学省（令和 3 年 3 月 12 日）「GIGA スクール構想の下で整備された 1 人 1 台端末の積極的な利活用等について（通知）」。
- ・文部科学省（令和 3 年 6 月 8 日）「デジタル教科書の今後の在り方等に関する検討会議」（第一次報告）。
- ・文部科学省（令和 3 年 9 月）「特別支援教育の充実について」（資料）。
- ・文部科学省「特別支援教育における ICT の活用について」。
- ・文部科学省・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成 28 年 11 月）「特別支援教育で ICT を活用しよう」リーフレット。
- ・兵庫県立教育研修所（平成 30 年度）通常の学級における特別支援教育の視点を生かした ICT 活用の在り方―「教えるツール」から「学ぶツール」へ。
- ・岩手県立総合教育センター（平成 28 年度）「特別支援教育におけるタブレット PC を活用した効果的な教育実践に関する研究」。
- ・文部科学省（2014）「学習上の支援機器等教材活用促進事業」。
- ・笹森 洋樹編著（2015）イラストでわかる特別支援教育サポート事典：「子どもの困った」に対応する 99 の事例。合同出版。
- ・榊原洋一、佐藤 暁（2014）発達障害のある子のサポートブック：保育・教育の現場から寄せられた学習困難・不適切行動へのすぐできる対応策 2800。学研
- ・上野 一彦、月森 久江（2018）発達障害を考える 心をつなぐ 発達障害のある子のケース別サポート事例事典。ナツメ社
- ・特別支援教育士資格認定協会（2021）LD ADHD & ASD 10 月号。明治図書。
- ・特別支援教育の実践研究会（2021）ICT×特別支援 GIGA スクールに対応したタブレット活用。明治図書。
- ・金森 克浩、梅田 真理、坂井 聡、富永 大悟（2019）発達障害のある子の学びを深める教材・教具・ICT の教室活用アイデア。明治図書。
- ・河野俊寛（2019）タブレット PC を学習サポートに使うための Q&A。明治図書。
- ・内山登紀夫監修（2014）通常学級でできるトラブル・行動問題への対処。ミネルヴァ書房。
- ・川上康則著（2010）〈発達のつまずき〉から読み解く支援アプローチ。学苑社。
- ・北出勝也（2012）学ぶことが大好きになる ビジョントレーニング 2 見る力をグングン伸ばして楽しく学習。図書文化社。
- ・佐々木正美監修・安倍陽子・幸田栄著（2012）発達障害の子どものびのび暮らせる生活サポートブック 幼児編。すばる舎。
- ・上野一彦監修・岡田智・森村美和子・中村敏秀著（2012）特別支援教育をサポートする 図解よくわかる ソーシャルスキルトレーニング（SST）事例集。ナツメ社。
- ・田中康雄著（2014）イラスト図解 発達障害の子どもの心と行動がわかる本。西東社。
- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所 HP「吃音について」。
- ・学びに凸凹のある子が輝くデジタル時代の教育支援ガイド(2021)。朝日新聞社・Gakken
- ・文部科学省（令和 4 年 12 月）通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果
- ・全国特別支援教育研究連盟編集（2022.5）特別支援教育研究。「どう進める？ 1 人 1 台端末時代の ICT 活用～特別支援教育のよさを生かす～」。東洋館出版社。

①柱
学習面・行動面

②項目

③実態

④背景要因

⑤支援の
ポイント

支援策
「あったら
いいな」
こんな
サポート



彩の国みんなのみかた
プログラム

1) 2本の柱について

学習面

- 聞く
- 話す
- 読む
- 書く
- 見る

行動面

- 生活
- 人のかかわり

読む (学習面)

初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み
出せる。

文中の語句や行を抜いたり、または繰り返し読んだり
する。

行抜かしや繰り返し (背景)

学習面（読む）背景

1) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

2) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

3) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

4) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

5) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

6) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

7) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

8) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

9) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

10) 読みや書きの練習が出来るように、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

支援のポイント

- 発表の場には必ず練習ができるようにし、読みやすい文章が並ぶように配慮するなど、児童生徒が力を発揮する場を設け、自信がつけようとする。

支援策「あったらいいな」こんなサポート例

- 発表を補助する教員や児童を当てて読んでいる箇所を分かりやすくするなど、単語や文節のまとまりが見て分かりやすい工夫をする。
- 読みやすく分かりやすいように、文字が大きく短い文章を用意する。
- タブレットや紙に文字を拡大したり読み上げ機能を使ったりする。
- デジタル教科書やデジタル教科書機能の活用する。
- 単語や文節のまとまりを見えやすくする。
- 読みやすい色、形、大きさに配慮した教材を提示する。
- 適切な支援を随時にとらえてポイントトレーニングをする。

「見る」サポート

目のたいそう



印刷したものをこちらで折るとリーフレットになります

山折り

「彩の国みんなのみかたプログラム」 って何だろう？

このプログラムは、児童生徒の「できた」「わかった」を増やします！
なぜなら、気になる内容をクリックしていくことで、教員が、
児童生徒の学習面や行動面の特別なニーズについて、背景要因を踏ま
えた指導をすることができるからです。

↓ URL はこちら

<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

QRコード
はこちら→



①柱➡②項目➡③実態➡④背景要因➡⑤支援のポイント
支 援 策

学 習 面	聞く	・聞き間違いがある（「知った」を「行った」と聞き違える）。 ・聞きもらしがある。 ・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。 ・指示の理解が難しい。 ・話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず、ついていけない）。
	話す	・適切な速さで話すことが難しい（たどたどしく話す。とても早口である）。 ・ことばにつまったりすることがある。 ・単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をしたりする。 ・思いつくままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい。 ・内容を分かりやすく伝えることが難しい。
	読む	・初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える。 ・文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする。 ・音読が遅い。 ・勝手読みがある（「いきました」を「いました」と読む）。 ・文章の要点を正しく読みとることが難しい。
	書く	・読みにくい字を書く（字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない）。 ・独特の筆順で書く。 ・漢字の細かい部分を書き間違える。 ・句読点が抜けたり、正しく打つことができなかつたりする。 ・限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない。
	見る	・文字や行を読み飛ばしてしまう。 ・どのように行動してよいかわからずキョロキョロしている。 ・物の全体像や細部がわからない。 ・周囲の状況がわからない。人の表情などがわからない、分かりにくい。 ・板書についていけない。
行 動 面	生活	・物の管理（落し物・忘れ物・整理整頓）が苦手である。 ・落ち着きがない、出歩きが目立つ。 ・課題または遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。 ・指示通りの行動、周囲に合わせた行動をすることが難しい。 ・気持ちの切り替え、自分をコントロールすることが苦手である。
	人との かかわり	・友だちとのトラブルが多い。 ・相手の気持ちを考えることが苦手である。 ・話を最後まで聞くことが苦手である。 ・言葉をうまく使えない。 ・ルールを守って行動することが苦手である。

例

- ① 文字を音の情報に変換することに時間がかかってしまう。
- ② 視線を行に沿って正しく速く追うことが難しい。
- ③ 文字を順番に追うことが難しい。
- ④ ……
- ⑤ ……

ポイント

必ず背景要因を確認してから支援策に行きます。

↓QR コードはこちら



↓URL はこちら

<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

例 支援のポイント

発表の際にはあらかじめ練習ができるようにして、読みやすい文章が当たるように配慮する。

例

支援策「あったらいいなこんなサポート」

- ・読みやすく分かりやすくなるように、文字を大きくしたり、短い文を用意したりする。
- ・デジタル教科書やデジ教科書等の活用をする。

具体例（動画等もあります）



目のたいそう

(令和 5 年 3 月末日現在)

【研究協力委員】

(スーパーバイザー)

織田 晃嘉 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部主任研究員

青木 高光 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部主任研究員 (令和 3 年度)

(委員長)

清水 励 鴻巣市立吹上小学校 校長

(副委員長)

井上 弘江 幸手市立行幸小学校 校長

塩塚 文啓 県立大宮北特別支援学校さいたま西分校 教頭

(委員)

木皿 優 埼玉大学教育学部附属特別支援学校 教諭

五十嵐 義登 県立深谷第一高等学校 教諭

澤田 隆視 県立上尾特別支援学校 教諭

岩淵 拓也 北本市立南小学校 教諭

岡田 悦子 戸田市立喜沢小学校 教諭

菅 拓哉 朝霞市立朝霞第一中学校 教諭

田中 丈士 坂戸市立浅羽野中学校 教諭

塩崎 貴裕 久喜市立栗橋南小学校 教諭

比嘉 亮太 三郷市立早稲田小学校 教諭 (令和 3 年度)

横谷 鉄平 教育局県立学校部特別支援教育課 主任指導主事

原子 一彦 教育局県立学校部特別支援教育課 主任指導主事 (令和 3 年度)

なお、県立総合教育センターにおいては、次の者が研究に当たった。

教職員研修担当 石戸谷 大輔 指導主事兼所員 (教育局県立学校部 ICT 教育推進課兼務)

(事務局)

森澤 由希 主任指導主事 横谷 鉄平 主任指導主事 (令和 3 年度)

金子 美里 指導主事兼所員 堀口 哲 指導主事兼所員 (令和 3 年度)

吉田 勝美 指導主事兼所員 阿相 道子 指導主事兼所員 (令和 3 年度)

堀口 剛 指導主事兼所員 山崎 慎也 指導主事兼所員 (令和 3 年度)

井上 浩一 指導主事兼所員 小林 航 指導主事兼所員 (教育局県立学校部 ICT 教育推進課兼務)

定方 千恵 指導主事兼所員 内田 考洋 指導主事兼所員 教育 DX 担当



彩の国

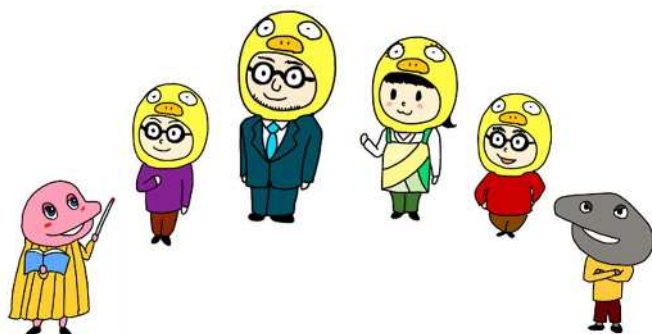
埼玉県

「彩の国みんなのみかたプログラム」はこちら



<https://sites.google.com/st.spec.ed.jp/mikata2/>

～子供と先生の笑顔のために～



特別支援教育担当
「マスコットキャラクター」

彩の国みんなのみかたプログラムを
活用した御感想や
御要望等は
こちらにお寄せください。
今後の改良に生かして参ります。





令和4年度調査研究報告書 第427号

「特別支援教育におけるICT機器の効果的な活用に関する調査研究（2年目／2か年研究）」

埼玉県立総合教育センター
特別支援教育担当